氷見市埋蔵文化財調査報告第20冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

１９９５年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９６年３月

氷見市埋蔵文化財調査報告第20冊

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

１９９５年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室
１９９６年３月

序

富山湾に面し海の幸，山の幸に恵まれた氷見市は，古くより人々の生活の場として，数多くの文化遺産を育み，守ってきました。

特に，大正７年に調査された大境洞窟は，日本で最初の洞窟遺跡調査として，同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として，学史にその名を留め，国指定史跡になっております。

しかしながら，近年，生活の豊かさ，利便さを求めて開発が進められる一方で，これらの貴重な文化遺産の保護のための営みも重視されているのであります。

市教育委員会といたしましては，文化遺産保護のため，市内全域の詳細分布調査を実施することにより，より充実した遺跡地図を作成することにし，平成５年度から調査を開始いたしました。

文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは，真の地域社会の発展につながるものであると考えます。

この報告書がより多くの方々に利用され，文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに，調査の実施及び報告書の作成にあたり，ご協力いただきました地元の方々，またご援助いただきました富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に，厚くお礼申し上げます。

平成８年３月

氷見市教育委員会
教育長　江　幡　　武

例　　言

1　本書は，富山県氷見市教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第３年度（1995年度）の報告書である。

2　調査にあたっては，富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学人文学部考古学研究室の指導と協力を得て，後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　遺物整理・実測・製図・写真撮影は，氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員大野究と富山大学考古学研究室の全員が協力して行った。

4　本文は，宇野隆夫（富山大学人文学部教授），大野 究，浅野良治・小野 基・金成淳一・小島あずさ・清水あゆみ・宿野隆史・鈴木悟嗣・鈴木由紀・滝沢 匡・戸田真美子・栃谷朋子・野水晃子・春名理史・深田亜紀・丸山 浩・三浦英俊（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。

5　参考文献は本文末に一括した。

6　遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図と写真の番号は統一して用いた。

7　採集遺物・記録書類は氷見市教育委員会で保存公開している。

8　編集は宇野隆夫・大野 究がおこなった。

目　　次

第１章　はじめに…… 1

1　調査の目的…… 1

2　調査の経過…… 1

3　氷見市の地勢と自然環境…… 3

4　1995年度調査区の地勢と地区割…… 4

第２章　分布調査の成果 …… 7

1　遺跡と採集遺物…… 7

(1)　万尾遺跡…… 7
(2)　万尾Ｂ遺跡…… 7
(3)　中谷内遺跡…… 8
(4)　久津呂城跡…… 9
(5)　下久津呂遺跡…… 9
(6)　上久津呂Ｃ遺跡…… 9
(7)　栗原Ａ遺跡……10
(8)　栗原Ｂ遺跡……10
(9)　上久津呂ゴタンダ山遺跡……10
(10)　上久津呂Ａ遺跡……10
(11)　上久津呂Ｂ遺跡……10
(12)　布施ハヶ田遺跡……11
(13)　深田前田遺跡……11
(14)　深田打越遺跡……11
(15)　矢田部六反坪遺跡……12
(16)　高松城跡……12
(17)　矢田部カベワリ遺跡……12
(18)　鉾根経塚……12
(19)　堀田モリノ田塚遺跡……12
(20)　神代羽連遺跡……13
(21)　神代ハタケダ遺跡……13
(22)　石崎遺跡……13
(23)　飯久保ナガモン遺跡……13
(24)　堀田ニキ塚山古墳群……13
(25)　堀田大久前遺跡……13
(26)　堀田ワタリウエ遺跡……14
(27)　堀田城跡……14
(28)　矢方一丁目遺跡……14
(29)　光西寺山古墳群……15
(30)　飯久保山ノ下遺跡……15
(31)　神代城跡……15
(32)　蒲田遺跡……16
(33)　堀田長尾遺跡……16
(34)　蒲田Ａ遺跡……16
(35)　飯久保後山古墳群……16
(36)　飯久保後山遺跡……16
(37)　矢田部ナカタ遺跡……17
(38)　飯久保城跡……17
(39)　正保寺遺跡……17
(40)　惣領遺跡……17

(41) 惣領砦跡……17
(42) 惣領古墳……18
(43) 惣領Ｂ遺跡……18
(44) 惣領コツテラ城跡……18
(45) 寺中竹端城跡……18
(46) 鞍骨オヤノヤチ遺跡……18
(47) 寺中向遺跡……19
(48) 鞍骨城ケ峰城跡……19
(49) 御林山（鞍骨山）城跡……19
(50) 仏生寺城跡……19
(51) 二ツ城跡……19
(52) 神代テラヤシキ遺跡……19
(53) その他の採集遺物……20

2　遺物の散布状態……21

(1) 縄文時代遺物の散布状態……21
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態…21
(3) 古代遺物の散布状態……22
(4) 中世遺物の散布状態……24
(5) 近世遺物の散布状態……25
(6) 小結……26

第３章　おわりに……29

参考文献……31

図　版　目　次

関連頁

図版１　Ｃ地区航空写真(1)……１～４
図版２　Ｃ地区航空写真(2)……１～４
図版３　遺物実測図(1)……７・８
図版４　遺物実測図(2)……11～19
図版５　遺物実測図(3)……14・20
図版６　遺物実測図(4)……20
図版７　遺物写真(1)……７・８
図版８　遺物写真(2)……11～19
図版９　遺物写真(3)……14・20
図版10　遺物写真(4)……20
図版11　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(1)……20
図版12　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(2)……20
図版13　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(3)……７～16
図版14　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(4)……12
図版15　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(5)……12
図版16　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(6)……15～18
図版17　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(7)……15～18
図版18　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(8)……18・19
図版19　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(9)……19
図版20　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(10)……19
図版21　Ｃ地区の遺跡と遺物採集地点(11)……20

挿　図　目　次

第１図　氷見市の地勢と地区割図……３
第２図　Ｃ地区図……５
第３図　Ｃ地区地区割図……６
第４図　Ｃ地区遺跡分布図……22
第５図　縄文時代遺物の散布状態……23

第６図　弥生・古墳時代遺物の散布状態……24
第７図　古代遺物の散布状態……25
第８図　中世遺物の散布状態……26
第９図　近世遺物の散布状態……27
第10図　時期不明（弥生～古代）遺物の散布状態……28

第1章　はじめに

1　調査の目的

氷見市が人の活動の舞台となったのは，現在知られている限りでは，今から約1万年前，上庄川上流域の丘陵においてである。以後，遺跡は丘陵から海岸まで広く分布し，現在に至るまで連綿と人びとの営みが続いたものと思われる。

氷見市の遺跡の数は，大正7年（1918）の大境洞窟・朝日貝塚の発見以後，昭和47年（1972）の『富山県遺跡地図』では83箇所，昭和58年（1983）の『氷見市遺跡地図』では143個所と，年々増加してきている。

しかし，これらの成果は系統だった分布調査によるものではなく，その範囲・時期などについて不明な点が多く，また未発見の遺跡も少なからず存在するものと予測される。

また近年の開発行為に伴い，遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており，中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において，埋蔵文化財の保護と活用のため，また保護と開発との調整のため，基礎資料として遺跡地図の一層の充実が望まれたのである。

2　調査の経過

このような状況下のもと，氷見市では平成4年度からスタートした第6次総合計画の主要施設の一つとして，「指定文化財の再調査はもとより，指定以外の文化財，埋蔵文化財の調査・発掘及び資料の収集に努め，活力ある文化財として，郷土の歴史的遺産の保護・顕彰を図る」ことをあげ，主要事業のひとつに「遺跡地図の作成」をあげた。

これを受けて氷見市教育委員会では，平成4年度に昭和58年の『氷見市遺跡地図』発行後の新知見を加えた『氷見市遺跡地図［第2版］』を発行し，234個所の遺跡を登録した。

さらに平成5年度からは，この遺跡地図をさらに充実させるため，国庫補助事業として市内遺跡詳細分布調査を実施することになった。

調査にあたっては，氷見市教育委員会を中心とし，富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て，下記の調査団を編成した。

調査の方針としては，市域の平野部全体を調査対象とし，7個年計画とすること，年度ごとに報告書を作成し，最終的にはより充実した遺跡地図を刊行することが決定された。

今年度の現地調査は，C地区について（第1図），1995年10月7日～10月15日までの計5日間，延べ150人余の参加を得て，実施した。　（大野　究）

氷見市埋蔵文化財分布調査団

団　　長：江幡　　武　（氷見市教育委員会教育長）

調　査　員：宇野　隆夫　（富山大学人文学部教授）

前川　　要　（富山大学人文学部助教授）

鈴木　瑞麿　（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

大野　　究　（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

調査補助員：新本　真之・長谷川幸志（富山大学大学院人文学科研究生）

中田　書矢・石内　詩保・稲石　純子・岩崎　誉尋・内田亜紀子・大川　　進・

大平奈央子・景山　和也・近藤　美紀・匂坂　友秋・塩田　明弘・滝　寿美代・

坪田　聡子・古沢亜希子・堀内　大介・三林　健一・米出　敬子・芳賀万里子・

石井　淳平・井手口恵美・海道　雅子・工藤　直子・小林　香織・田中慎太郎・

田中　幸生・中島　義人・中谷　正和・平井　晶子・藤田　良子・古屋　聡洋・

松本　　茂・宮崎順一郎・向井　裕知・本村　　徹・山崎　雅恵

調査協力者：浅野　良治・小野　　基・金成　淳一・小島あずさ・清水あゆみ・宿野　隆史・

鈴木　悟嗣・鈴木　由紀・滝沢　　匡・戸田真美子・栃谷　朋子・野水　晃子・

春名　理史・深田　亜紀・丸山　　浩・三浦　英俊

（富山大学人文学部考古学研究室二回生）

岡田　一広・小幡　鮎子・梶田亜友美・須田　雅昭・高志こころ・高安　洋治・

塚田　和也・中島　和哉・西村　倫子・早川さやか

（富山大学人文学部考古学研究室一回生）

事　務　局：島　　勝彦　（氷見市教育委員会生涯学習課課長）

井波　咲朗　（氷見市教育委員会生涯学習課課長代理）

西井　紀夫　（氷見市教育委員会生涯学習課文化係長）

池田　幸代　（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

池田　秀正　（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

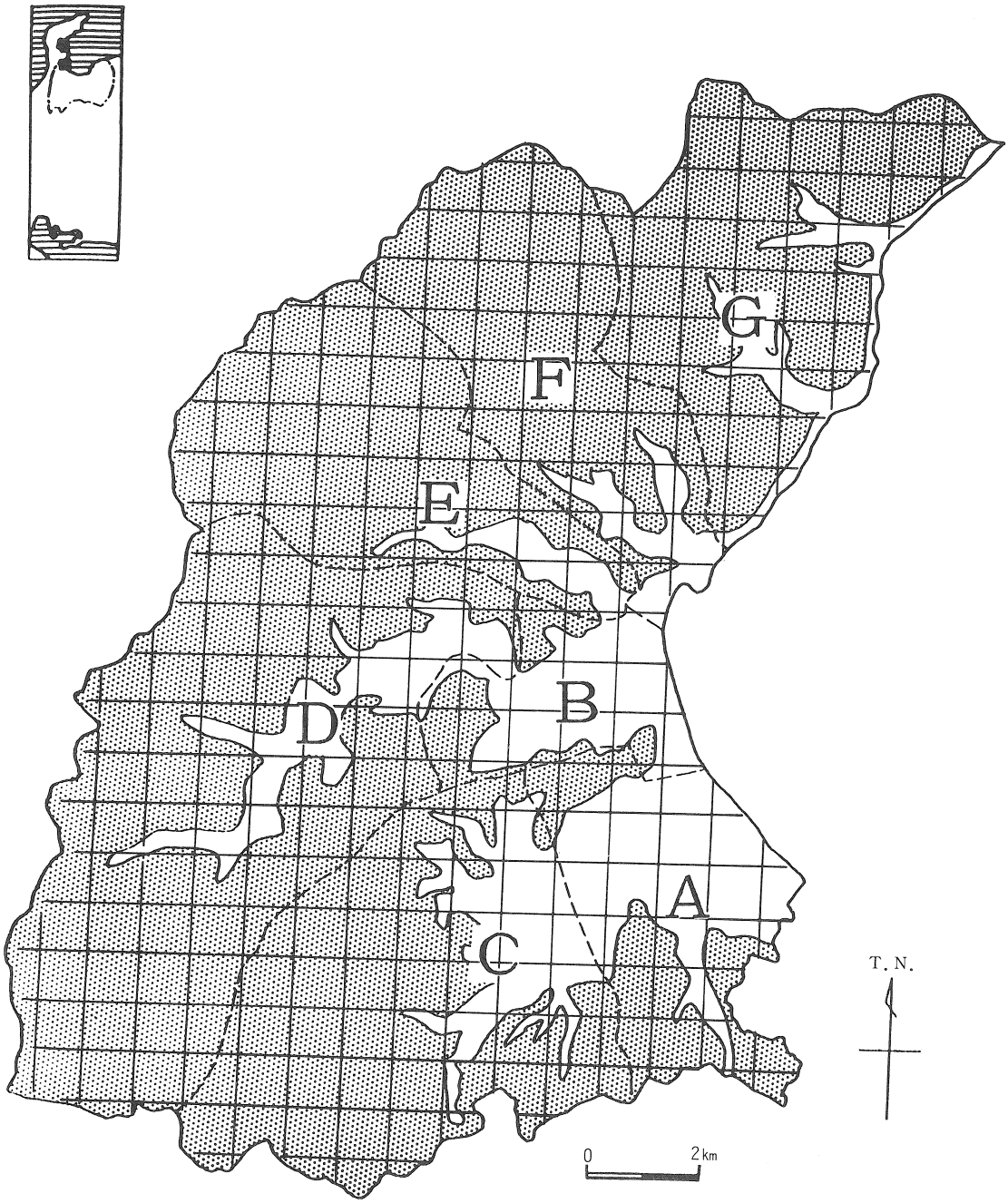
高野　弘文　（氷見市教育委員会生涯学習課社会教育主事）

（小野 基・春名理史）

3　氷見市の地勢と自然環境

氷見市は富山県の西北部に位置し，能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに，太田村を除く氷見郡１町17村が合併し，現在の氷見市が成立した。面積は約230㎢，人口は約６万人である（第１図）。

市域は，北・西・南の三方が標高300～500ｍの丘陵に取り囲まれ，東側は富山湾に面してい



A地区 1993年度調査地区
B地区 1994年度調査地区
C地区 1995年度調査予定地区
D地区 1996年度調査予定地区
E地区 1997年度調査予定地区
F地区 1998年度調査予定地区
G地区 1999年度調査予定地区

第1図 氷見市の地勢と地区割図

(国土座標 X＝138°59′55″ Y＝35°48′を基準とする。)

る。丘陵の大部分は新第三紀層から成り，山間部では地すべりが多い。市北半部は，上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川などの小河川とその支流からなる谷地形であり，上庄川流域以外は，まとまった平野が少ない。市南半部は，かつてラグーンであった平野と，その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は，海岸線のほぼ中央に位置し，近年は北と南に広がりつつある。鉄道では，氷見と高岡をむすぶJR氷見線が通り，主要道路では高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と，富山市と石川県羽咋市をむすぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は，稲作を中心とした農業と，ブリ定置網に代表される漁業であったが，近年は第２・３次産業就職者が多く，高岡市などの市外へ通勤する人も多い。

一方，口能登の観光地として，市内には旅館・民宿が建ち並び，近年は温泉も市内各地で噴出している。

4　1995年度調査地区の地勢と地区割

今回対象とするＣ地区は十三谷地区西側であり，市域の南西部にあたる調査は踏査によるものとし，対象は平野部と丘陵部の農地とした（図版11～21）。

十三谷地区の東側は初年度に調査を終えており，今回は谷の残りの部分である。地形的には旧十二町潟の平野と，その奥に続く多くの谷といえる。

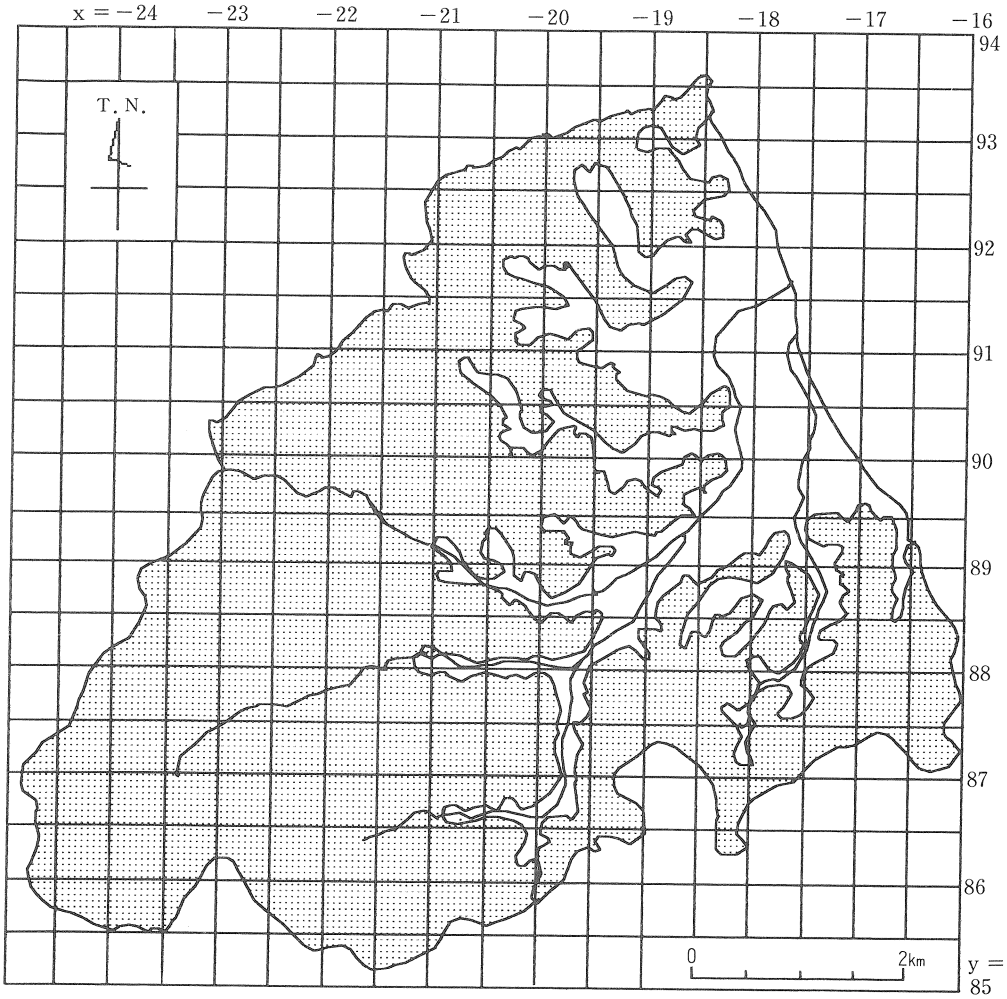
Ｃ地区では，平野に面した丘陵の裾で，多くの遺跡が確認されているが，一方で平野中央部で古代以後の遺跡が周知されており，その頃から徐々に陸地化していたと考えられる。調査によって，十二町潟の変遷の基準資料を得たい。

一方，谷部の多くはこれまでほとんど状況が把握されていなかった地区であるが，古代・中世遺跡の立地が確認されている谷があり，こうした状況が各谷において同様であるのかどうか，確認できるものと思われる。特に仏生寺地区は，丘陵部に多くの中世寺院の伝承が残る地区であり，谷部での状況が注意されるところである。

現地調査は，調査地区を丘陵尾根，道路などによって大別・細別して実施した。そしてその結果を氷見市都市計画図座標に沿った１辺500ｍの方眼を単位として集計し，時期別の採集遺物量を図示して，遺跡の盛衰と立地の変化を把握する基礎資料とした（第５～10図）。

（大野　究）

第2図　C地区図（縮尺 1/70,000）



第 3 図　C 地区地区割図

第２章　分布調査の成果

１　遺跡と採集遺物

(1) **万尾遺跡**（図版13の１，氷見市遺跡地図第２版63）氷見市万尾字二俵目

万尾集落の北側の東に向いた浅い谷に所在する。標高は谷口では2.4ｍ，谷奥においては4.8ｍである。土地改良に際して，地下約１ｍから７世紀～８世紀前半頃の須恵器杯・甕口縁部破片が出土している（大野 1994）。

今回の調査において採集した遺物は縄文土器６片，須恵器３片，珠洲３片，鉄釉陶器２片，鉄釘１本，時期不明土器13片の総計28片である。このうち４片を図示した（図版３の１～４）。

１は越中瀬戸のすり鉢である。口径は20㎝を測る。茶褐色の鉄釉を施し，胎土は砂粒を含み，浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

２は須恵器の杯の口縁部である。９世紀頃のものである。口径は12㎝を測る。胎土は白色砂粒を含み，淡い青灰色を呈する。焼成はやや不良であり，還元は軟質である。

３・４は須恵器の壺である。３は古代のものであり，胎土は密，青灰色を呈し，焼成は還元硬質である。４は６世紀のものであり，胎土は密，青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。

(2) **万尾Ｂ遺跡**（図版13の２）氷見市万尾

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。万尾集落南側の八幡宮への入口のある浅い谷に所在する。標高は，３～４ｍを測る。現在は畑として利用している。

採集した遺物は，須恵器４片，珠洲１片，越中瀬戸１片，土器51片（この内，年代を判定できるものは弥生時代後期末のものである）の総計57片である。このうち６片を図示した（図版３の５～９，13）。

５は土器甕の口縁部である。弥生時代後期末のものであり，口径は18㎝を測る。胎土は砂粒を多く含み，浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

６は土師器皿の底部である。中世のものであり，底径は５㎝を測る。胎土は砂粒が少なく，浅黄橙色を呈する。焼成は軟質である。

７は土器小型器台の脚部である。弥生時代後期末頃のものである。胎土は密であり，外面は浅黄橙色，内面は灰黄色を呈する。焼成はやや不良である。

８は須恵器の杯蓋である。８世紀後半頃のものである。直径は約16㎝を測り，つまみの痕跡がある。胎土は密であり，灰色を呈する。焼成は良好であり，還元硬質である。

９は越中瀬戸の匣鉢である。口径は15㎝を測り，茶褐色の鉄釉を施している。胎土は砂粒を含み，酸化して浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。

13は土器椀である。弥生時代のものである。底径は約４㎝を測る。胎土は砂粒を少し含み，

黄褐色を呈する。焼成は良好である。　(戸田真美子)

(3) **中谷内遺跡**（図版13の３）氷見市中谷内

今回新たに発見した遺跡である。遺跡は中谷内西側の丘陵の谷間に所在し，丘陵の裾野から平地にかけて立地する。平地部分は現在畑になっている。白山社の南西約300ｍ，益養寺の北西約100ｍに所在する。

採集した遺物は土器28片，須恵器14片，珠洲２片，越中瀬戸２片，京焼２片，天目１片，伊万里１片，石器２片，鉄釉陶器１片，鉄滓８片，計61片である。その内19片を図示した（図版３の10～14，16～29)。

10は土師器甕であり，古代のものである。胎土は１～２㎜程の礫を含み，色調は黄橙色を呈する。焼成は良好である。口径は20㎝を測る。

11は土器の壺口縁部であり，弥生時代後期末頃のものである。口径は17㎝を測り，胎土は砂粒が少なく，色調は明橙色を呈する。焼成は良好である。

12は土師器の口縁部であり，古代のものである。胎土は１㎜程の礫を含み，色調は浅黄橙色を呈する。焼成はやや良である。口径は20㎝を測る。

13は土製の羽口である。表面に鉄滓もしくは銅滓が熔着している。胎土は大粒の砂粒を含み，色調は外面は灰褐色，内面は浅黄橙色を呈する。焼成は軟質である。

14は壺口縁部であり，弥生時代後期のものである。胎土は砂粒を含み，色調は明橙色を呈する。焼成は良好である。口径は25.5㎝を測る。

16は珠洲蓋である。胎土はやや密であり，砂粒をわずかに含み，色調は灰色を呈する。焼成は良好であり，還元硬質である。口径は８㎝を測る。珠洲（12世紀～15世紀頃）の初期の製品であろう。

17は珠洲甕である。胎土は密であり，色調は灰色を呈する。焼成は良好であり，還元硬質である。

18は須恵器の杯口縁部であり，７～８世紀頃のものである。胎土はやや密であり，わずかに砂粒を含み，色調は灰色を呈する。焼成は良好であり，還元硬質である。口径は14㎝を測る。

19は須恵器の杯の口縁部であり，８世紀のものである。胎土は密であり，砂粒を含み，色調は灰色を呈する。焼成は良好であり，還元硬質である。口径は15㎝を測る。

20は天目椀であり，中世のものである。胎土は密であり，色調は胎土が灰黒色，釉は黒色を呈し，焼成は良好である。中国製陶器の可能性がある。

21は須恵器広口甕であり，古代のものである。胎土は密であり，色調は青灰色を呈する。焼成はやや良好であり，還元硬質である。

22は須恵器の杯底部であり，７～８世紀頃のものである。胎土はやや密であり，わずかに砂粒を含み，色調は灰白色を呈する。焼成はやや不良であるが，還元は良好であり硬質である。底径は５㎝を測る。

23は須恵器の杯底部であり，7世紀頃のものである。外面に篦調整，内面に撫で調整を施し，底部に回転篦削り痕を残す。胎土は密であり，色調は灰白色を呈する。焼成はやや良好であり，還元硬質である。底径は8㎝を測る。

24は須恵器の杯蓋であり，7世紀末のものである。胎土は密であり，灰色を呈する。焼成は良好であり，還元硬質である。口径は14㎝を測る。

25は須恵器の杯の口縁部であり，8～9世紀頃のものである。胎土は砂粒が少なく，色調は浅黄色を呈する。また内外面に回転撫で調整を施している。焼成は良好であるが，還元は不良である。口径は13㎝を測る。

26は須恵器の鉢の底部である。表面は右回転の回転撫で調整と篦削り調整を施している。胎土は砂粒を多く含み，色調は青灰色を呈する。焼成は良好であり，還元も良好である。底径は9㎝を測る。

27は須恵器の子持ち壺であり，6世紀頃のものである。胎土は砂粒が多く，色調は青灰色を呈する。焼成は不良であるが，還元は良好である。直径約2㎝，高さ約1㎝程の突起がついている。

28は近世の越中瀬戸皿の底部である。胎土は密で砂粒を含んでおり，色調は胎土が淡黄色，釉は茶褐色を呈する。焼成は良好である。底径は3.4㎝を測る。

29は縄文時代の叩き石であろう。（鈴木悟嗣）

(4) 久津呂（くづろ）城跡（図版13の4，氷見市遺跡地図第2版65）氷見市下久津呂字城

遺跡は下久津呂の丘陵の突端部に立地し，遺跡の標高は約10～30ｍを測る。城を築いた場所は，丘陵の小高い所であり，19×37ｍ程の平坦面となっている。現在は畑として利用している。

この遺跡に関する史料は『越中志徴』や『長家系譜』に断片的に残っているが，それによると，天正6年（1578）には既に空城となっていて，同年長氏が10月下旬から11月初旬にかけて一時的に使用したとされる。そしてその後は使用されることはなかったという（高岡 1990）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。（鈴木悟嗣）

(5) 下久津呂（しもくづろ）遺跡（図版13の5，氷見市遺跡地図第2版276）氷見市下久津呂

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。下久津呂地区には，志雄線と惣領・志雄線を結ぶ農道の分岐点があり，遺跡はその分岐点で農道をはさんだ両側に位置する。北の丘陵には上久津呂Ｃ遺跡と久津呂城跡がある。

今回の調査で採集した遺物は，土師器9片である。（丸山 浩）

(6) 上久津呂（かみくづろ）Ｃ遺跡（図版13の6，氷見市遺跡地図第2版158）氷見市上久津呂

粟原地区から下久津呂地区にかけて西に突出した丘陵部の尾根に所在する。同じ丘陵の先端部には久津呂城跡がある。標高は約24.0～45.0ｍを測る。過去に火葬骨の入った珠洲壺が出土しているが，詳細は不明である。今回の調査では遺物を採集できなかった。（戸田真美子）

(7) **粟原（あわら）A遺跡**（図版13の７）氷見市粟原

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。本遺跡は，粟原地区の北西から下久津呂に至る丘陵南西部の斜面から裾にかけて立地する。標高は４～20ｍを測る。現在は，畑や墓地になっている。

採集した遺物は，須恵器５片，土師器14片の総計19片である。このうち須恵器１片を図示した。(図版３の35)

35は須恵器提瓶の口縁部であり，６～７世紀頃のものである。口径は約５㎝を測る。内外面共に，撫で調整を施しており，また外面には水平方向にカキ目を呈している。胎土は，密であり，色調は灰色を呈し，焼成は良好である。

(8) **粟原（あわら）B遺跡**（図版13の８）氷見市粟原

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。本遺跡は，粟原地区の北西から下久津呂に至る丘陵の裾に立地する。南東へ250ｍの位置には，前述の粟原Ａ遺跡がある。標高は，６～10ｍを測る。採集した遺物は，土器14片であるが，時期が不明なものが多い。　（小島あずさ）

(9) **上久津呂（かみくづろ）ゴタンダ山遺跡**（図版13の９，氷見市遺跡地図第２版71）氷見市上久津呂ゴタンダ山

遺跡は上久津呂方面に突出した丘陵の中腹に位置し，太五谷内池に隣接している。遺跡の標高は約20～40ｍを測る。これまでに石斧，土師器が採集され，縄文時代・古墳時代の遺跡とされている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。　（鈴木悟嗣）

(10) **上久津呂（かみくづろ）A遺跡**（図版13の10，氷見市遺跡地図第２版66）氷見市上久津呂字前田

上久津呂集落の東側の水田に所在する。推定範囲の西限は万尾川南側の集落から東に約250ｍの地点，東限は約500ｍの地点である。遺跡の西側に接して上久津呂Ｂ遺跡がある。これまでに土地改良や水道工事などにおいて須恵器杯蓋，杯の底部，甕の口縁・胴部破片などが採集されている。これらの遺物は７世紀～８世紀前半頃のものであり，主体は７世紀後半と考えられている（大野 1994，湊 1969)。

今回の調査では時期不明の土器を１片採集しただけである。　（戸田真美子）

(11) **上久津呂（かみくづろ）B遺跡**（図版13の11，氷見市遺跡地図第２版113）氷見市上久津呂

上久津呂公民館の南方約300ｍに位置する。現在，丘陵沿いに住宅地があり，道路を挟んで東側には水田が広がる。今回の調査によって，遺跡の範囲が南東に約100ｍ広くなることを確認した。

今回の調査で採集した遺物は，縄文土器４片，土器103片，須恵器６片であり，そのうち５片を図示した。

30は器種不明の縄文土器である。口径は17㎝を測る。胎土はやや密であり，色調は赤褐色である。焼成は良好である。

31は弥生土器の壺であり，口径約20cmを測る。胎土は密であり，海綿骨針を含む。色調は淡橙色であり，焼成は良好である。

32は土師器椀であり，古墳時代のものである。口径は10cmを測る。胎土はやや粗であり，砂粒を含む。色調は淡橙色であり，焼成は良好である。

33は土師器の台付皿の底部であり，古代末のものである。底径は約6cmを測る。色調は灰褐色であり，胎土は密である。焼成は良好である。

34は須恵器杯の底部であり，古代のものである。底径は7cmを測る。色調は青灰色であり，胎土は密である。焼成は還元硬質・良好である。（丸山 浩）

(12) 布施八ヶ田遺跡（図版13の12，氷見市遺跡地図第2版76）氷見市布施字八ヶ田

布施の円山の北西裾から，仏生寺川にかけて立地する。標高は，4～10mを測る。仏生寺川改修工事で遺物が出土し，縄文時代後期の遺跡として知られているが，須恵器も1点出土している（大野 1994）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。（小島あずさ）

(13) 深原前田遺跡（図版13の13）氷見市深原字前田

惣領・志雄線沿いにある法願寺から農道をはさんで西南約300m，深原地区の丘陵の裾部に位置する。氷見市史編纂委員会考古部会の分布調査によって確認された遺跡であり，この時に須恵器（8世紀～9世紀），土師器，珠洲が採集されている。

今回の調査において採集した遺物は，須恵器25片，越中瀬戸1片，鉄釉陶器1片，時期不明土器1片である。そのうち6片を図示した。

48は近世の鉄釉陶器すり鉢である。口径は22.5cmを測る。胎土は密であり，色調は茶褐色である。焼成は良好である。

49は越中瀬戸の小皿である。口径は7.5cmを測る。内外面に撫で調整，口縁部に薄い鉄釉を施す。胎土はやや密であり，白みがかった黄褐色を呈する。釉調は黒褐色であり，焼成は良好である。

50は須恵器の杯の底部であり，9世紀のものである。底径は6cmで，胎土は砂礫を含む。焼成は良好である。

51は古代の須恵器壺である。胎土は密であり，色調は青灰色である。焼成は良好である。

52は古代の須恵器甕である。内面の一部に当具痕が残る。胎土は密であり，灰白色を呈する。焼成は良好である。

53は古代の須恵器横瓶である。内外面に回転撫で調整を施し，外面の一部に叩き目，内面の一部に当具痕がある。胎土はやや密であり，色調は黄味を帯びた灰白色である。焼成は良好である。（丸山 浩）

(14) 深原打越遺跡（図版13の14）氷見市深原

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。仏生寺川左岸の深原集落にむかってのびる

丘陵の南の裾，深原集落の南西に立地する。

採集した遺物は須恵器12片，土師器４片，近世陶器１片の総計17片であり，そのうち須恵器４片を図示した（図版４の36～39）。

36・37は須恵器の杯の底部である。８～９世紀のものであり，底径は８㎝である。内面と外面ともに回転撫でを施す。焼成は良好，胎土はやや密であり，灰白色を呈する。この２片は同一個体である可能性がある。

38は９～10世紀頃の須恵器杯の底部である。内面に回転撫でを施す。焼成は良好，胎土はやや密であり，灰白色である。

39は須恵器杯である。８～９世紀のものであり，口径は13㎝である。内面，外面ともに回転撫でを施す。焼成は良好，灰白色であり，胎土は砂礫を少量ふくむ。（深田亜紀）

⑮ 矢田部六反坪遺跡（図版13の15）氷見市矢田部字六反坪

矢田部地区から仏生寺川に向けてのびる丘陵南西部の斜面から裾にかけて立地する。標高は８～20ｍを測る。氷見市史編纂委員会考古部会が分布調査で確認した遺跡であり，土師器を採集している。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（小島あずさ）

⑯ 高松城跡（図版14の16，氷見市遺跡地図第２版186）氷見市粟原・上田

粟原から早借にぬける志雄線の東方，標高154.5ｍの山上を中心にした一帯が城跡である。伝承から高松城は，その西方2.7㎞にある池田城の出城であった可能性が高く，池田城主小浦氏の家臣であった高松右衛門が，天正年間に居城としていたという。城郭は主郭部分と出丸的な郭の二つに大きく分け，それらを結ぶ尾根上に二重の堀切とその間に小郭を設けている。主郭の周りには全周にわたって帯郭をめぐらし，また主郭から南東・北・南西に向って伸びる尾根筋は，それぞれ堀切で断ち切っている（高岡1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（丸山 浩）

⑰ 矢田部カワベリ遺跡（図版14の17）氷見市矢田部

今回の調査において新たに発見した遺跡である。深原集落と飯久保集落の間の谷，仏生寺川から西へ２㎞の位置にあり，上矢田部集落の西に立地する。標高は20～30ｍを測る。

中世の宝篋印搭の破片を数個体分，石仏１体，近世の越中瀬戸骨壺が散布している。

⑱ 鉾根経塚（図版15の18，氷見市遺跡地図第２版67）氷見市鉾根

御林山から，北東に約１㎞のところにある，鉾根集落の唯明寺の北東に立地する。標高約130ｍを測る。経塚があったという伝承があるが詳細は不明である。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（深田亜紀）

⑲ 堀田モリノ田塚遺跡（図版16の19，氷見市遺跡地図第２版185）氷見市堀田

本遺跡は，二上丘陵北部の堀田ニキ塚山より北西200ｍ，南北に流れる仏生寺川から東方に約900ｍのところに位置する中世の遺跡である。現在は水田となっている。以前の調査では珠

洲が採集されている（氷見市教育委員会 1993）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

⑳ **神代羽連遺跡**（図版16の20，氷見市遺跡地図第２版74）氷見市神代字羽連

三方峰峠より北方約2.9㎞，仏生寺川より東方約500ｍの平坦部に位置し，西方約100ｍに神代ハタケダ遺跡，南方約100ｍに石崎遺跡が分布する。昭和38年に氷見高校歴史クラブが調査して縄文時代～９世紀頃までの遺物を採集している（富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1964）。現在は水田として利用している。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

㉑ **神代ハタケダ遺跡**（図版16の21，氷見市遺跡地図第２版195）氷見市神代字羽連

二上丘陵を南に臨む平坦地にあり，飯久保ナガモン遺跡から北東に約100ｍ，上代羽連遺跡から西方に約100ｍに位置する中世の遺跡である。現在は水田として利用している。以前の調査では土師器が採集された（氷見市教育委員会 1993）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

㉒ **石崎遺跡**（図版16の22，氷見市遺跡地図第２版125）氷見市堀田字石崎

神代川の右岸，標高約５ｍの平坦部にあり，矢方一丁目遺跡から北方に約100ｍ，神代羽連遺跡から南方に約100ｍに位置する。以前，圃場整備事業に先立つ事前調査により土師器・須恵器・珠洲焼などが採集されている（富山県教育委員会 1979）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（宿野隆史）

㉓ **飯久保ナガモン遺跡**（図版16の23，氷見市遺跡地図第２版228）氷見市飯久保

本遺跡は仏生寺川中流右岸にある丘陵の麓に位置し，現在の飯久保集落の北側にあたる。標高は約10ｍを測る（氷見市教育委員会 1988）。

今回の調査では縄文土器１片，弥生土器１片，土師器13片，須恵器１片，越中瀬戸１片を採集したが，小破片のため図示できなかった。（野水晃子）

㉔ **堀田ニキ塚山古墳群**（図版16の24，氷見市遺跡地図第２版171）氷見市堀田

本遺跡は二上山丘陵から派生する小字「ウラカツマ」の丘陵上及び，南側丘陵上に位置する。南側丘陵上には円墳と推定できるマウンドが２個所確認されている。１基は直径約22ｍ，高さ約５ｍであり二段築成と推定できる。またその南東に位置する１基は，直径約８ｍ，高さ0.5ｍのものである。小字「ウラカツマ」の丘陵上にはかつて方墳が２基存在していたらしいが，現在は病院の敷地となり両者とも消滅している（氷見市教育委員会 1988）。

今回の調査においては遺物を採集できなかった。（鈴木由紀）

㉕ **堀田大久前遺跡**（図版16の25，氷見市遺跡地図第２版78）氷見市堀田

二上山丘陵から派生する小丘陵に挟まれた細長い谷の出口に位置する。谷を出た北側には堀田集落が所在する。標高は約８ｍを測る。本遺跡の所在する場所は，かつての川底であり，遺跡の中心はその南側にある可能性が高い。約600ｍ離れた位置には，堀田ワタリウエ遺跡が所

在する。両遺跡は出土遺物の時期がほぼ同じであり，関連するものである可能性が高い。

本遺跡は，1966年の堀田川河川改修工事において土器が出土し，遺跡として登録された。1979年には氷見市教育委員会が農免道路拡張に伴う発掘調査を行っている。遺構は確認されなかったが，須恵器・土師器・珠洲が出土した。須恵器は杯蓋が11個体出土したが，そのうち7個体の裏面には墨が付着しており，硯に転用されたものであった。なお本遺跡の存続時期は7世紀中葉から9世紀前半頃と，13世紀頃の2時期であると推定できる（氷見市教育委員会1980・1988）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（野水晃子）

(26) 堀田（ほりた）ワタリウエ遺跡（図版16の26，氷見市遺跡地図第2版86）氷見市堀田字ワタリウエ

本遺跡は，二上山丘陵から派生する小丘陵に挟まれた細長い谷の中に位置する。谷の大部分は水田であり，谷を出た北側に堀田集落が存在する。かっては堀田西谷内遺跡と呼ばれていた。昭和62年（1987）の氷見市教育委員会の調査において，須恵器，土師器，青磁，白磁，珠洲焼など，古墳時代から中世にかけての遺物が出土している（氷見市教育委員会 1988・1993）。

今回の調査においては，遺物を採集できなかった。（鈴木由紀）

(27) 堀田（ほりた）城跡（図版16の27・氷見市遺跡地図第2版154）氷見市堀田

堀田の集落から南へ約900ｍ入った谷の山上に位置し，標高は85ｍから100ｍである。南北約200ｍの規模があると推定できる。現在確認できる遺構は郭4，堀切10，土塁2，土橋5，である。周辺には山城も多いが，堀田城はこれまで文献資料には全く記されていなかった遺跡である（高岡 1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(28) 矢方一丁目（やのほういっちょうめ）遺跡（図版16の28・氷見市遺跡地図第2版77）氷見市矢方字一丁目

神代の北に位置する丘陵の裾の水田に位置し，標高は約2ｍを測る。排水溝掘削中に発見され，炭化したクルミの実やツバキの実，弥生後期の土器が出土している（氷見高等学校歴史クラブ 1964）。今回の調査でも弥生時代後期末頃の土器140片，須恵器12片（そのうち4片は同一個体），珠洲2片を採集しており，そのうち12点を図示した（図版5の63～74）。

63は弥生土器壺である。胎土に砂粒と海綿骨針を含み，焼成は良好であり，淡橙色を呈する。口径は20㎝を測る。

64は弥生土器壺である。胎土に砂粒を含み，淡橙色を呈する。口径は14㎝を測る。

65は弥生土器高杯である。胎土に砂粒と海綿骨針を含み淡橙色を呈する。

66は弥生土器壺である。胎土に砂粒と海綿骨針を含む。口径は16㎝を測る。

67は弥生土器高杯である。胎土には砂粒は少なく軟質である。淡橙色を呈する。

68は弥生土器の壺である。胎土に砂粒と海綿骨針を含み，淡橙色を呈する。頸部の内径は15㎝を測る。

69は須恵器杯蓋であり，8～9世紀頃のものである。胎土は緻密であり，青灰色を呈する。

焼成は還元硬質・良好である。頂部上面の一部に回転篦削り調整を施す。

70は須恵器蓋である。胎土は密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

71は須恵器横瓶であり，7～9世紀頃のものである。胎土は密であり，オリーブ色を呈する。焼成は良好である。

72は須恵器甕である。胎土は砂粒を含み，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

73は珠洲すり鉢である。珠洲Ⅱ～Ⅲ期（13世紀頃）のものである。卸目は4条を確認できる。胎土は密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

74は珠洲すり鉢である。珠洲Ⅳ期（14世紀頃）のものである。胎土は密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。口径は37㎝を測る。

(29) 光西寺山古墳群（図版16・17の29，氷見市遺跡地図第2版143）氷見市神代・飯久保

神代と飯久保の境をなす丘陵上に位置し，標高は約64ｍを測る。この丘陵は，現在市内長坂に所在する東旭山光西寺が1574年から1790年まで所在していた山である。古墳は径7～14ｍの円墳が3基確認されているが，周辺にマウンド状の高まりがさらに数箇所確認されている。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（三浦英俊）

(30) 飯久保山ノ下遺跡（図版16，17の30）氷見市飯久保

今回の調査で新たに発見された遺跡である。本遺跡は三方峰から北東へのびる小丘陵裾部に位置する。今回の調査で採集した遺物は，須恵器5片，土師器3片，珠洲1片の総計9片である。このうち2片を図示した（図版4の61，62）。

61は須恵器の杯蓋の口縁部である。口径は約13㎝を測る。内外面共に回転撫で調整を施している。胎土は密であり砂粒が少ない。色調は灰色を呈し焼成と還元は良好である。

62は須恵器甕の体部である。外面は平行叩きであり擬格子となっている，3㎝の幅に8条を数える。また水平方向のカキ目を施す。内面は同心円紋であり，木目は表われていない。胎土は密であり，砂粒を含む。色調は灰色を呈し，焼成と還元は良好である。（鈴木由紀）

(31) 神代城跡（図版16の31，氷見市遺跡地図第2版169）氷見市神代ノノ山

二上丘陵の三方峰から北へ伸びる尾根の先端，神代集落の東側に立地する。本遺跡の東側にある堀田城とは，500ｍ程離れている。標高約60～70ｍ，麓からの比高差は約50～60ｍを測る。1988年度に確認された中世の城跡であり文献資料に記載はなく，遺物は確認されていない。確認できる遺構としては，山頂部に主郭（26ｍ×29ｍ）と，東に張り出した小尾根の先端に出丸らしい郭がある。堀切は北尾根筋に4本，東尾根筋に2本，南尾根筋に4本あり，最南の堀切には土橋を設けている。西方1㎞には狩野氏の居城，飯久保城があり，飯久保城－神代城－堀田城と横一線に並び，本遺跡西部の防禦が手薄なことから，本城は飯久保城の出城と考えられている（氷見市教育委員会1988，高岡1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(32) **蒲田(かわだ)B遺跡**（図版16の32，氷見市遺跡地図第２版232）氷見市蒲田

二上丘陵の三方峰峠から北側へのびる尾根の西斜面，蒲田A遺跡の北700ｍに位置し，蒲田集落に面している。標高約35ｍである。これまで中世の遺跡として知られ，土師器１点が確認されているが，詳細は不明である（氷見市教育委員会 1993）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（滝沢 匡）

(33) **堀田長尾(ほりたながお)遺跡**（図版16の33，氷見市遺跡地図第２版229）氷見市堀田

本遺跡は二上山丘陵から派生し堀田地区へのびる小丘陵の尾根上に位置する。標高は約100～135ｍを測る。南へ約330ｍの位置には蒲田A遺跡が所在する。遺物が確認されておらず年代は不明であるが，マウンドがあり，中世墓である可能性が高い。

今回の調査においては遺物を採集できなかった。

(34) **蒲田(かわだ)A遺跡**（図版16の34，氷見市遺跡地図第２版230）氷見市蒲田・堀田

本遺跡は二上山丘陵から派生し堀田地区へのびる小丘陵の尾根上に位置する。標高は約100～135ｍを測る。北に約330ｍの所には堀田長尾遺跡が所在する。遺物が確認されておらず年代は不明であるが，中世の砦跡である可能性が高い。

今回の調査においては遺物を採集できなかった。

(35) **飯久保後山古墳群**（図版13・17の35）氷見市飯久保後山

本遺跡は，御杯山から派生し，東へとのびる小丘陵上に位置する。現在は，丘陵のすぐ下に集落があり，仏生寺川が流れている。その東には，飯久保地区の水田が広がっている。氷見市史編纂委員会考古部会の分布調査によって確認された遺跡であり，直径約16ｍ，高さ約２ｍの円墳である。また周囲に直径５～８ｍの円墳状の高まりが２箇所存在する。今回の調査で採集した遺物は，砥石２片である。（鈴木由紀）

(36) **飯久保後山(いいくぼうしろやま)遺跡**（図版13・17の36）氷見市飯久保字後山

仏生寺川の左岸の丘陵地帯に位置する。本遺跡の南西約250ｍの位置に矢田部ナカタ遺跡（中世）があり，また，東に約250ｍの位置に飯久保後山古墳群がある。標高は約30ｍを測る。

本遺跡は氷見市史編纂委員会考古部会の分布調査によって確認された遺跡である。縄文時代の打製石斧・ピエスエスキーユ・剝片が採集されている。今回の調査では弥生土器５片を採集し，このうち１片を図示した（図版４の40）。

40は弥生土器の高杯である。直径は約13㎝。表面に磨きがあり，胎土は少量の砂礫を含み，黄褐色を呈する。焼成は良好である。

また，近世の塚が１基ある。直径約３ｍ，高さ約0.5ｍの円墳状であり，越中瀬戸の小皿と蔵骨器が散乱している。蔵骨器の上には河原石をのせているらしい。今回の調査では倒れた墓石も１個体を確認した。また，越中瀬戸の蔵骨器には，中には骨片があるものもあった。今回は，主要なもののみを採集し，７片を図示した（図版４の41～47）。

41・42は越中瀬戸の無釉骨壺である。胎土は砂粒を多く含み，41は明黄褐色，42は黄褐色を

呈する。焼成は良好である。いずれも外面に文字を記しているが，一部分のため判読できない。

43・44は越中瀬戸の匣鉢であり，同一個体のものである可能性がある。胎土は石英，砂粒を含み，黄褐色を呈する。焼成は良好である。

45は越中瀬戸の壺である。胎土は砂礫を含み，明黄褐色を呈する。焼成は良好である。

46・47は越中瀬戸の壺であり、同一個体と思われる。薄い鉄釉がかかっており，釉調は茶褐色である。胎土は細かい砂礫を含み，白みがかった黄褐色を呈する。焼成は良である。

(37) 谷田部ナカタ遺跡（図版17の37）氷見市谷田部字ナカタ

前述の飯久保後山遺跡と同じ丘陵地帯にあり，その距離は約250ｍ。標高は約30ｍを測る。

本遺跡は氷見市史編纂委員会考古部会の分布調査によって確認された遺跡であり，土師器が採集されている。

今回の分布調査では土師器10片を採集したが，いずれも小破片であるため図示できなかった。

(38) 飯久保城跡（図版17の38，氷見市遺跡地図第２版75）氷見市飯久保後山

仏生寺川の中流右岸にそびえる山上一帯に位置する。標高は約70ｍを測る。麓には飯久保の集落があり，その西端にある八幡神社の鳥居の傍が登り口になっている。中世には城下集落として存在したことが知られている。

この城跡は最高所のある峰を中心とした，多数の郭からなる西側地区と，少し離れた東側の峰を中心とする東側地区の２つに分かれる。主体部となるのは西側地区であり，物見台・櫓などの施設，主郭，居住施設などがあったらしい。また北側部分には南北に続く道の両側に薬研堀があり，集落からの登り口が城内に入る場所（虎口）がはっきりと形をとどめており，城下集落から主郭へと至る道を確認することができる。この城が築かれた年代ははっきりとしていないが，城主については，加賀を本拠地としていた狩野氏の流れをくむ，狩野中務だと伝えられている（高岡 1990）。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。

(39) 正保寺遺跡（図版17の39）氷見市飯久保字正保寺

仏生寺川の中流右岸，飯久保城跡の南西の山続きに位置する。標高は約50～70ｍを測る。「正保寺山」と称する場所があり，寺院跡と伝えられている。丘陵裾に石造物がまとめられている。

今回の調査では，遺物を採集できなかった。　（栃谷朋子）

(40) 惣領遺跡（図版17の40，氷見市遺跡地図第２版84）氷見市惣領

仏生寺川と鞍骨川の合流地点から約1.4㎞鞍骨川を遡った左岸の平坦部に，惣領と呼ばれる集落がある。本遺跡はこの南方に位置する。古墳時代～奈良・平安時代の遺跡であり，須恵器，土師器，馬歯などが出土している。

今回の調査では土器片を３点採集したが詳細は不明である。

(41) 惣領砦（図版17の41，氷見市遺跡地図第２版128）氷見市惣領

仏生寺川と鞍骨川の合流地点から約4.5㎞鞍骨川を遡った左岸の丘陵に立地する中世の砦跡

である。標高は約102mを測る。位置的には東の飯久保城と西の鞍骨山城の中間にあたり，両者を結ぶ線上にある。砦は尾根上に3郭を連ねる連郭形式であり，それぞれの郭の間を堀切によって隔てている。主郭の北側中腹斜面には帯郭を形成している。『越中志徴』には，惣領砦は飯久保と共に鞍骨山に本城を構える国人狩野氏の出城であったとの記載がある。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(42) 惣領古墳（図版17の42，氷見市遺跡地図第2版73）氷見市惣領字紅地平1番地

仏生寺川と鞍骨川の合流地点から約4㎞仏生寺川を遡ったところに惣領B遺跡がある。そこから200m北の独立小丘陵上に位置する。標高は約20mを測る。古墳はこの丘陵の南端の高まりを利用した円墳であり，南北径約30m，東西約13m，高さ約5mを測る。

丘陵頂部の地表下10～20㎝のところに，川原石などを敷き並べた礫床が広がっている。大正末年の発掘において直刀残欠，須恵器提瓶，須恵器高杯片などが採集された。昭和38年に氷見高等学校歴史クラブにより緊急調査が行われ，刀子残欠，直刀残欠，鉄鏃残欠，碧玉製管玉，ガラス製小玉などが出土している。岩崎石（砂岩）が2個存在することから石室の存在が考えられるが，どの程度の規模かは不明である（高岡 1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（金成淳一）

(43) 惣領B遺跡（図版17の43，氷見市遺跡地図第2版130）氷見市惣領

惣領集落から約500m南の平地に立地する。現在では水田として利用している。以前より古墳～奈良・平安時代の遺跡として知られ，須恵器，土師器が採集されているが，詳細は不明である。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(44) 惣領コツテラ城跡（図版17の44）氷見市惣領字コツテラ

仏生寺（寺中）集落の北側の丘陵の尾根に立地する。標高は80～90mを測る。惣領土豪屋敷（仮称）として紹介されているが，詳細は不明である（堀 1993）。今回は踏査できなかった。

(45) 寺中竹端城跡（図版17の45）氷見市仏生寺（寺中）字竹端

仏生寺（寺中）集落の南東側に突き出た丘陵の尾根の先端部に，集落を見下ろすようにして立地する。標高は，20～30mを測る。寺中城（仮称）として紹介されているが，詳細は不明である（堀 1993）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（清水あゆ美）

(46) 鞍骨オヤノヤチ遺跡（図版17・18の46）氷見市鞍骨

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。鞍骨と仏生寺の境にある丘陵の北の裾に位置し，標高は約20mを測る。採集した遺物は須恵器5片，備前1片であり，そのうち5点を図示した（図版4の54～58）。

54は備前のすり鉢であり，18世紀代のものである。胎土はやや密であり，表面は赤褐色，断面は青灰色を呈する。焼成は良好であり，口径は30㎝を測る。

55は須恵器甕であり，内面に同心円紋の当て具痕がある。胎土はやや密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

56は須恵器甕である。口縁部の直下に突帯があり，８世紀後半頃のものである。断面は僅かに赤みを帯びた青灰色を呈する。焼成は還元硬質である。口径は22㎝を測る。

57・58は須恵器の甕である。いずれも胎土は密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。（三浦英俊）

(47) 寺中向遺跡（図版18の47，氷見市遺跡地図第２版283）氷見市仏生寺寺牛地内

今回の調査によって設定した遺跡である。本遺跡は，仏生寺川上流に形成される東西に伸びた谷合いの出口付近に広がる平坦部に立地し，標高約19ｍを測る。今回の調査では珠洲２片を採集した（図版４の59，60）。

59は珠洲甕の体部である。外面の平行叩きは，３㎝幅に９条ある。胎土はやや密であり焼成は良好，色調は青灰色である。

60は珠洲甕の肩部である。平行叩きは３㎝幅に３条ある。胎土はやや密であり細かい粒子を含む。焼成は良好であり，色調は青灰色である。（滝沢 匡）

(48) 鞍骨城ヶ峰城跡（図版18，19の48）氷見市鞍骨地内

御林山の約1.5㎞東側に標高183.5ｍの丘陵がある。その頂上付近に立地し，標高は150～180ｍを測る。その詳細は不明である（堀 1993）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（清水あゆ美）

(49) 御林山（鞍骨山）城跡（図版19の49，氷見市遺跡地図第２版127）氷見市鞍骨

鉾根と赤毛の中間にそびえる二上山丘陵の一角の御林山（標高237.6ｍ）の山頂が城跡である。伝承によると，室町時代の国人狩野氏の本城とされるが，比較的高所に立地する山城であり，縄張りは簡素であることから，万一の際に立てこもる奥城であったと考えられている（大野 1990，高岡 1990）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(50) 仏生寺城跡（図版19の50，氷見市遺跡地図第２版129）氷見市仏生寺上中

鞍骨山城跡の南南東約１㎞に位置する仏生寺山（標高270.3ｍ）の山頂に位置する。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(51) 二ツ城跡（図版20の51，氷見市遺跡地図第２版72）氷見市仏生寺脇ノ谷内

二上山丘陵の一角，三千防山（標高264.2ｍ）の山頂に位置するが，詳細は不明である。

今回の調査では遺物を採集できなかった。

(52) 神代テラヤシキ遺跡（図版16の52，氷見市遺跡地図第２版184）氷見市神代

二上山丘陵の一角，蒲田Ａ遺跡の南西約1.3㎞に位置し，標高は約100ｍである。以前の調査において，珠洲の破片が確認されている（弘源禅寺総合調査団 1994）。

今回の調査では遺物を採集できなかった。（浅野良治）

(53) その他の採集遺物

本調査では，遺跡として設定した地区外の採集品についても，将来的な遺跡発見の可能性を高めるため，すべて採集地点を記録・報告している（図版11～21）。これらの内，主なものについて示す（図版５の75・76，図版６の77～83）。

75は須恵器甕であり，９～10世紀頃のものである。外面に平行叩き，内面に平行当て具痕がある。胎土は緻密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

76は珠洲甕である。外面に平行叩き目を施す。胎土は緻密であり，青灰色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

77は鉄釉陶器の甕の口縁部から体部にかけての破片である。口径は約36㎝を測る。内面，外面ともに回転撫で調整を施している。胎土の色調は灰黄褐色，釉調は光沢を帯びた茶褐色であり，全面に鉄釉を施す。胎土は緻密であり，焼成は極めて良好である。

78は77と同様，鉄釉陶器の甕の体部であり，77と同地点で採集した。轆轤で成形した後，布により縦方向に丁寧に調整している。幅６㎝ほどの布目の圧痕が残る。胎土の色調は赤褐色であり，釉調は暗赤褐色である。胎土は緻密であり，焼成は極めて良好である。

79は縄文時代の打欠き石錘である。破損し，ほぼ半分が残る。全長約４㎝，幅約４㎝，厚さ約1.5㎝を測る。

80は須恵器壺の体部から底部にかけての部分である。外面に回転篦削り調整，内面に回転撫で調整を施しており，古代のものである。胎土は砂粒が少なく，色調は灰白色，焼成は良好である。

81は須恵器杯であり，８～９世紀のものである。胎土は密であり，灰白色を呈する。焼成は還元硬質・良好である。

82は打欠き石錘である。全長約８㎝，幅約４㎝，厚さ約２㎝である。

83は珠洲甕の体部である。外面には平行叩目を施し，幅３㎝の間に13本条ある。胎土はやや密であり，色調は青灰色，焼成は良好である。

84は轆轤整形の土師器の皿である。胎土は緻密で赤褐色を呈する。焼成は良好である。口径は12㎝を測る。

（三浦英俊・滝沢 匡）

2　遺物の散布状態

本年度はC地区において，縄文時代から近世に至る568破片・口縁部7.06個体分の遺物を採集した。その遺跡・採集地点毎の詳細は，前節において述べている。

本節ではこれらの採集資料を，歴史資料として活用するために，時期別に大別・計量し，その散布状態の傾向について示すことにする。なお時期別の総量は，縄文時代が15片・口縁部1.44個体分，弥生・古墳時代が158片・0.63個体分，古代が122片・1.25個体分，中世が26片・0.16個体分，近世が39片・0.91個体分である。また時期不明とした遺物の多くは，刷毛目調整を施す甕の体部破片であり，弥生時代から8世紀前半の間としか判定できないものである（第10図）。また旧石器時代の遺跡は確認できないが，地形からみて将来発見される可能性が高いであろう。

なお本年度調査地区は，氷見市の南西部にあたり，旧十二町潟の平野奥部と，多く丘陵・開析谷とからなっている。遺物散布量についても，この地勢・地形と関連づけて述べる努力をしたい。

なお地区割りは氷見市都市計画図座標に合わせて，国土座標x＝138°59′55″，y＝35°48′を原点とする1辺500mの方眼を設定し，その東北角の座標を地区名としている。

(1)　縄文時代遺物の散布状態（第5図）

縄文時代の遺物は，土器12片，石器3点を7地区から採集した。土器はすべて小破片であり磨滅しているため，器種と細かな年代を判定できるものはなかった。ただし打欠石錘が2点あり，切目石錘がないことから，縄文時代後期以前に中心がある可能性を考えておきたい。

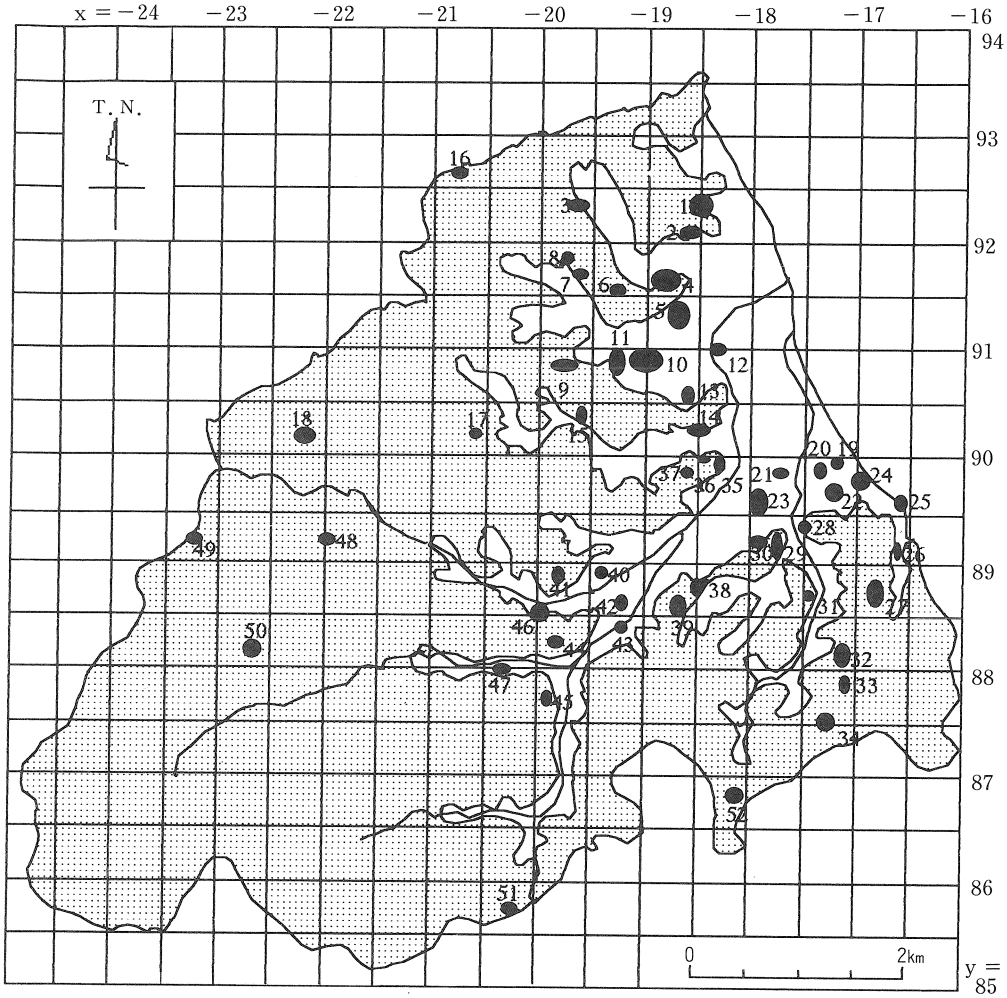
これら縄文時代の遺物のほとんどは，調査地域北部の平野に面した丘陵裾部と，調査地域南部の開析谷とに散布している。採集資料の総量が少ないため遺跡の実態は不明であるが，谷口の丘陵裾部，あるいは谷とそれを挟む丘陵を中心として遺跡が展開していた可能性が高いであろう。

(2)　弥生・古墳時代遺物の散布状態（第6図）

弥生・古墳時代の遺物は，土器150片・0.63個体分，須恵器8片を8地区から採集した。

この時期には，縄文時代に比べて遺物の量が急激に増加している。特に（x＝－17.0，y＝89.5）地区を中心に広がる矢方一丁目遺跡では142片と非常に多くの遺物を採集した。また遺物は主に，調査区北部と東部の谷口丘陵裾部に散布しており，調査区南部の谷・丘陵部においては遺物を採集できなかった。

ただし本年度調査地区において確認できた資料は，大多数が弥生時代後期末頃の資料である。また時期不明資料のかなりも，この時期に属するものである可能性が高い。弥生時代後期末の頃には遺跡が低地から平野奥部や丘陵部に広まる傾向が北陸において広く存在し，本地区の分布も，その一環の現象と理解してよいであろう。



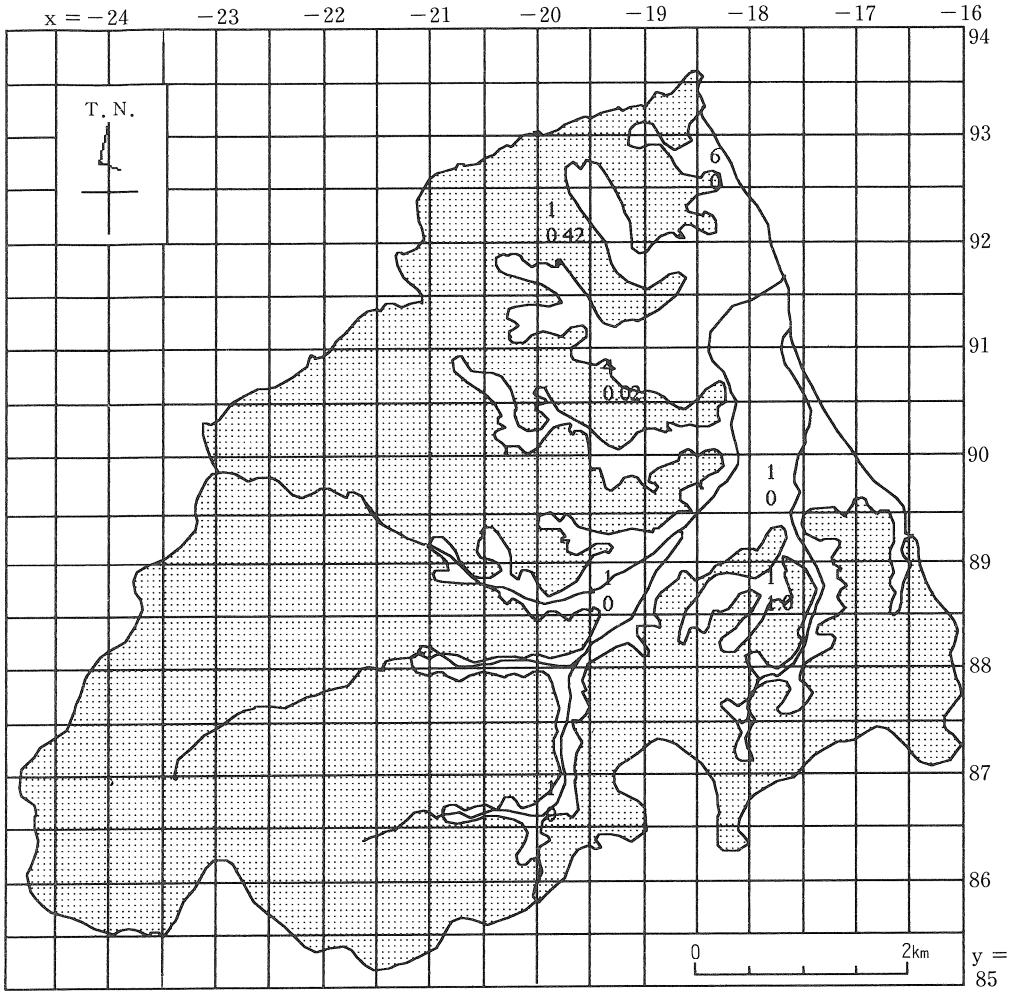
第４図　Ｃ地区遺跡分布図（遺跡名は図版11～21参照）

これに対して古墳時代の遺物は散発的であり，また須恵器子持壺のような特殊品を含んでいる。これらは集落関係だけではなく，古墳に伴うものである場合も多かったであろう。実際，各谷に面した丘陵部や平野微高地には，多くの古墳が所在している。

(3)　古代遺物の散布状態（第７図）

古代の遺物は，須恵器92片・0.97個体分，土師器30片・0.28個体分を21地区から採集した。年代的には，７世紀代から資料の増加が顕著となり，８・９世紀がピークである。

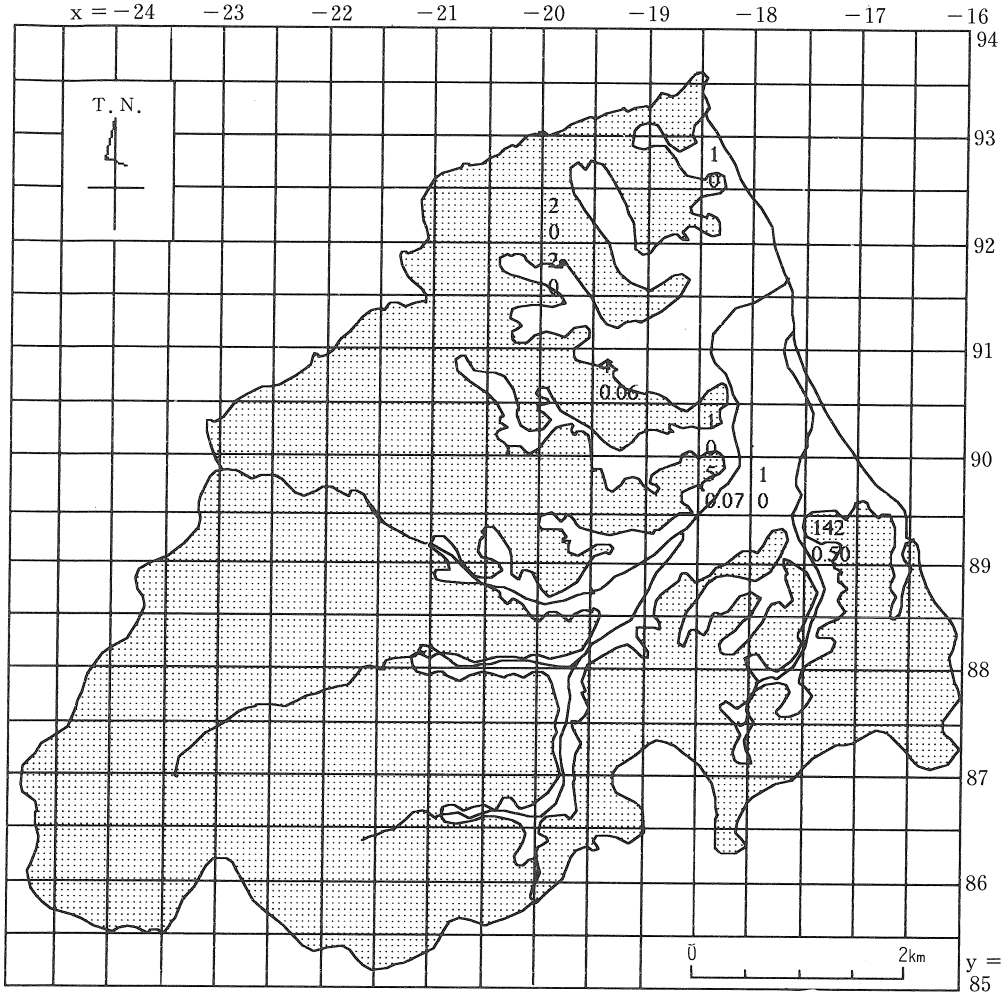
この時期には，丘陵裾部・谷部に加えて，調査地域北東部の平野部にも遺物が散布するよう



第5図　縄文時代遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）

になり，（x＝−18.0，y＝89.5）地区を中心とする飯久保山ノ下遺跡や（x＝−17.5，y＝89.5）地区を中心とする飯久保ナガモン遺跡において若干の遺物を採集した。また丘陵部でも（x＝−19.5，y＝92.5）地区を中心とする中谷地遺跡において29片，（x＝−18.5，y＝91.0）地区を中心とする深原前田遺跡において25片と，比較的多くの遺物を採集している。

この時期には，調査地区平地部のほぼ全域にわたって採集資料が増加している。この時期の造墓活動は目立たず，その多くは集落を従来以上に安定して営むようになった結果であることを推定できる。この時期，平野奥部や谷・丘陵部が生活の場として本格的に復活しているもの



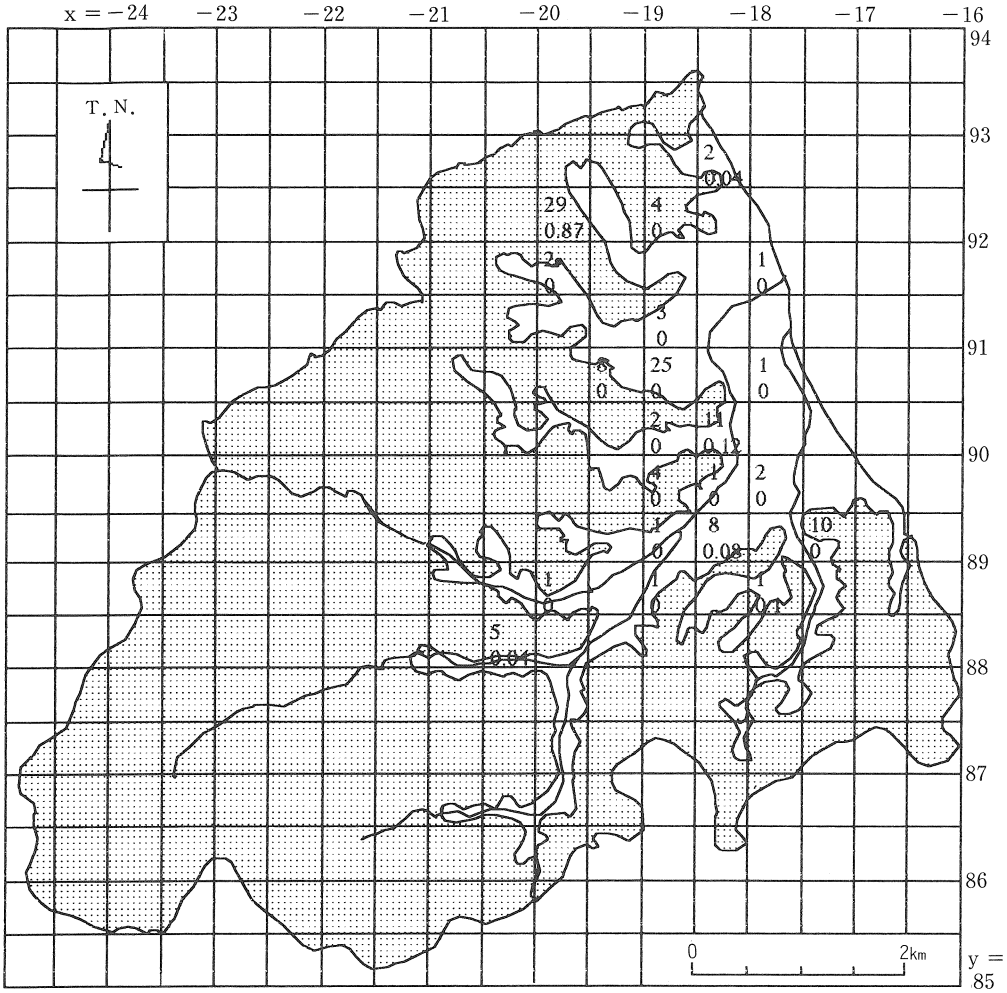
第 6 図　弥生・古墳時代遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）

と推察したい。　　（野水晃子）

(4)　中世遺物の散布状態（第 8 図）

中世の遺物は，珠洲19片・0.08個体分，土器 3 片，天目椀 1 片，土師器 1 片・0.08個体分，越中瀬戸 1 片，越前 1 片を17地区から採集した。

その分布の傾向は古代とほぼ同様であり，平野部から丘陵裾・谷奥部にかけて，少ないながらも広範に遺物を採集することができた。また丘陵部の森林地帯においては，遺物の採集が難しいが，山岳寺院や城館の遺跡は確実に増加している。



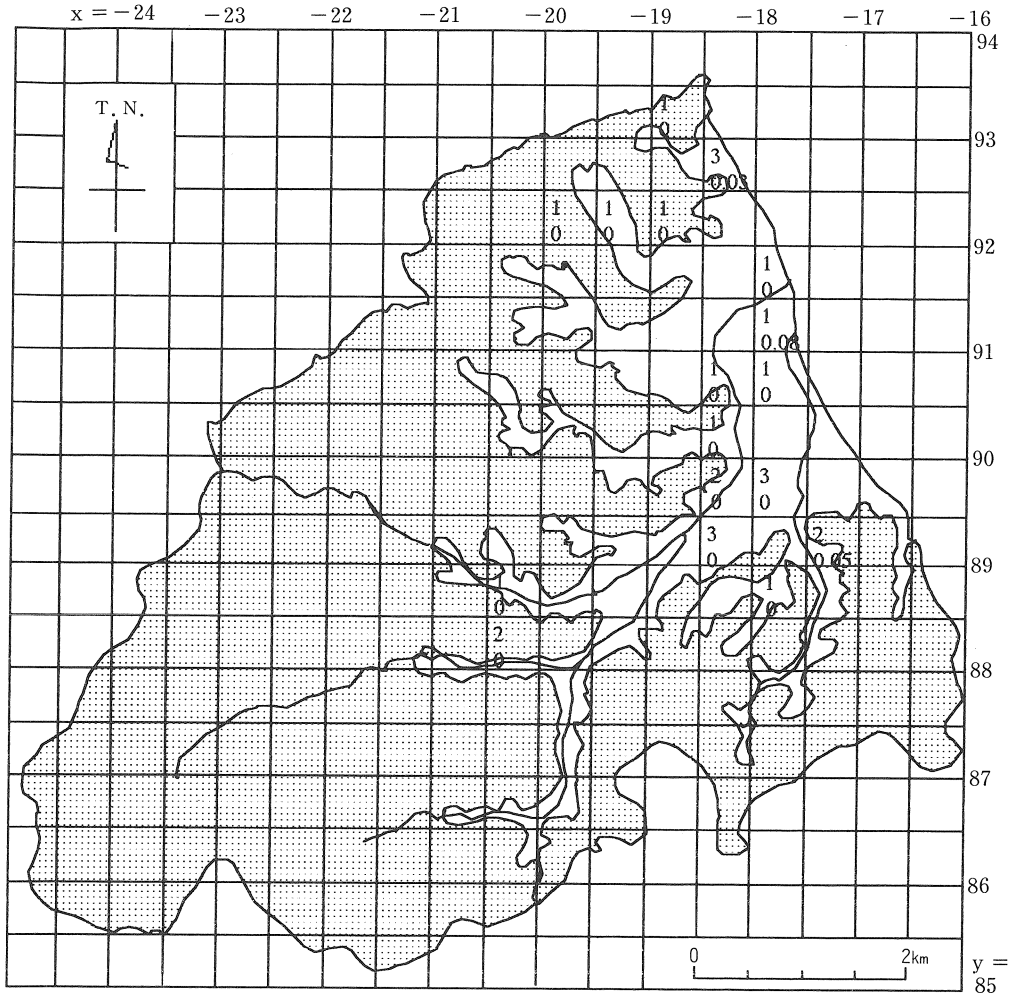
第 7 図　古代遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）

この時期に採集遺物の総量が減少するのは，おそらく木・漆器や鉄製煮炊具の使用が増加したためであり，少量でも遺物が広範に散布することを重視するべきであろう。

(5)　近世遺物の散布状態（第 9 図）

近世の遺物は，越中瀬戸 5 片・0.02個体分，鉄釉陶器 9 片・0.24個体分，伊万里系 6 片，唐津系 2 片・0.16個体分，京焼系 2 片，備前 1 片・0.08個体分，産地不明の近世陶器12片・0.41個体分，土製品 2 片を23地区から採集した。

遺物の散布は，平野に面した丘陵裾部・谷口に多いが，各時期を通じて平坦部に最も広く遺



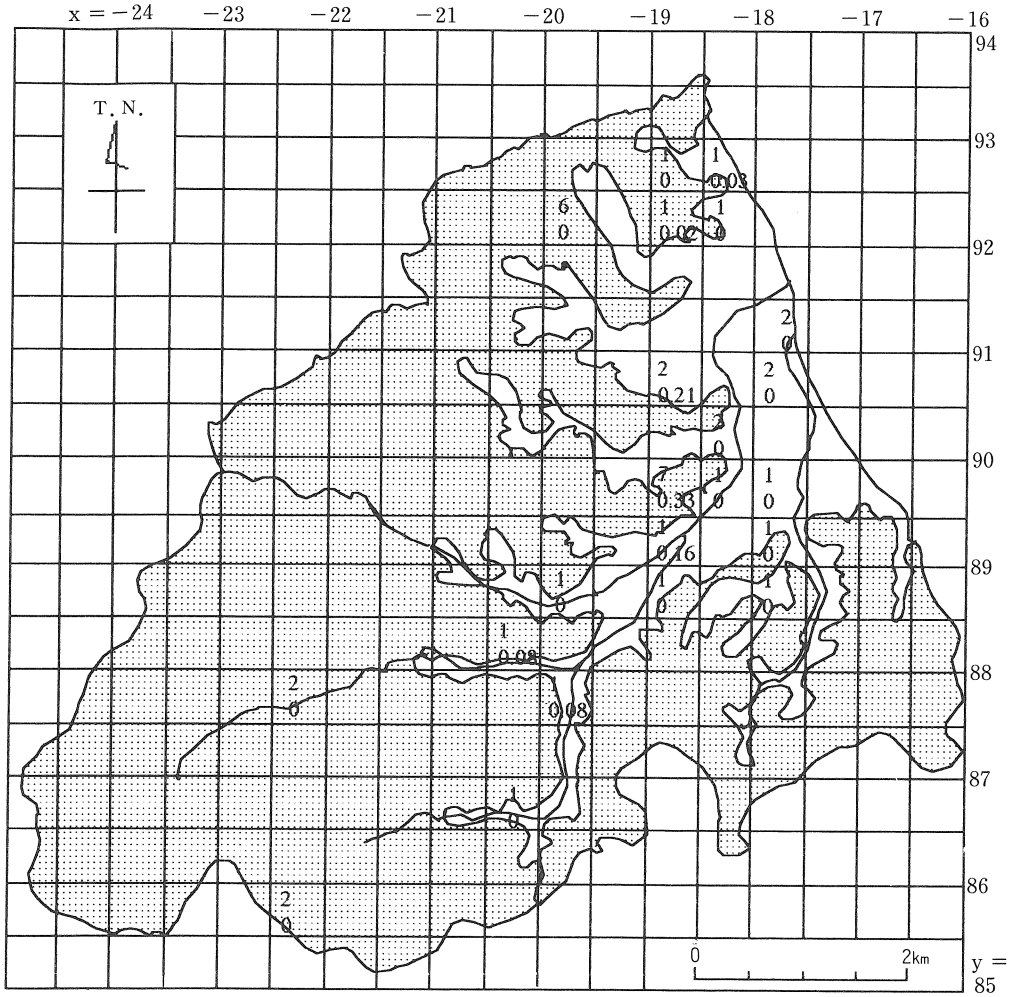
第 8 図　中世遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）

物が散布している。

(6) 小　結

各時期の遺物散布状態は以上の通りである。各期を通じて，平野に面した丘陵裾部あるいは，谷口に主に散布するが，時期毎に散布量と散布状態に若干の違いが存在する。

遺物散布量の増減については，破片数と口縁部個体数とによって若干の相違があるが，破損度による誤差を補正する口縁部個体数の増減が，総量は少ないものの実態をよりよく反映しているであろう。また前述のように中世以後については，漆器・鉄製煮炊具の普及を考慮しなけ

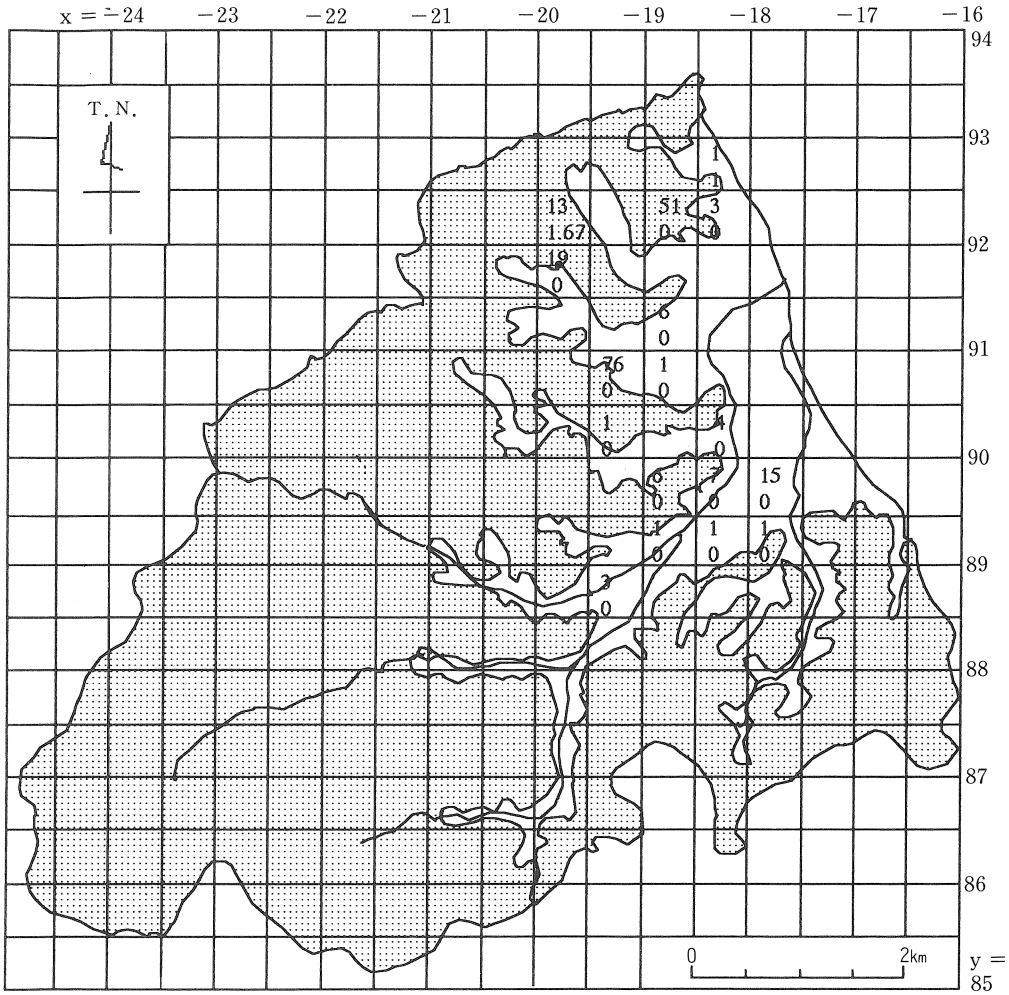


第 9 図　近世遺物の散布状態（上段：破片数，下段：口縁部個体数）

ればならない。

以上からその営みの盛衰を復元すると，縄文時代の資料は若干量が存在するが，弥生時代後期以前の資料はほとんどないと言える。そして弥生時代後期末頃に資料が急激に増加し，以後は再び減少した。しかし古墳時代から近世にかけて，平野奥部・谷・丘陵における営みは着実に定着して水準を高めてきたと評価してよいであろう。

縄文時代の遺跡については，実態が不明であるが，少なくとも後期以前には丘陵裾部・谷口や丘陵に挟まれた谷を生活適地として選地していたのであろう。丘陵の森林資源が，生活において



第10図　時期不明（弥生～古代）遺物の散布状態
（上段：破片数，下段：口縁部個体数）

重要であったものと推察したい。そして以後は平野低地部に居住の中心を移したのであろう。

また弥生時代後期末以後の営みの緻密化については，古墳の分布，古代遺物の急増，中世山岳寺院・城館遺跡・墓地の増加，鉄滓の存在などからみて，平野奥部・谷における農業開発に加えて，調査地区全体の丘陵資源の開発も重要な意味をもっていたと推察したい。今後，遺跡の調査が進めば，その具体的な歴史を復元できるであろう。またその歩みは時々の政治・経済情勢とも密接な関係をもち，その積み重ねの上に現代の景観が成立しているものと考える。

（浅野良治・野水晃子）

第3章　おわりに

1995年度のC地区遺跡詳細分布調査において，568片・口縁部7.06個体分の資料を採集して，3箇年の調査採集遺物の総量は，3937片・18.59個体分となった。また本調査によって，新たに10遺跡を設定し，C地区の遺跡総数は51となった。さらに従来知られていたかなりの遺跡についても，遺跡の範囲を変更・拡大した。

C地区は氷見市の南部にあたり，仏生寺川を中心とする平野の奥部と谷・丘陵からなっている。また1994年度には，下流域の平野・海岸部・丘陵にあたるA地区を調査しているので，その成果と合せると，一つのまとまりをなす地域について，悉皆分布調査を実施したことになる。これは遺跡保護の面だけではなく，学術的にも貴重な事例になるであろう。そして本年度の成果については，前章において述べているので，ここではA地区の知見を加えて，海辺，平野，開析谷・丘陵（海辺・里・山）という3種の地勢に大別し，人々の営みの軌跡をたどることとしよう。

なお氷見市の平野部は縄文時代早期～中期にはほとんどが内湾であり，縄文時代後・晩期に潟湖となり，弥生時代以後に次第に沖積が進行していった。ただし時期別の地形復元を正確に行うには，まだ解決すべき問題が多いという（藤田 1983）。

以上の3種の地形の内，最も遺跡密度が高く，また存続時期が長いのは，海辺の砂丘である。富山湾の豊かな海産資源に根差した漁撈と，また水運が縄文時代から現代に至る本地域の営みの基礎をなしていたことは間違いないであろう。特に氷見市域の海辺の縄文遺跡については，A地区だけではなく，朝日貝塚や大境洞窟遺跡のように著名な遺跡が存在する。

縄文時代には，平野部を取り巻く丘陵部裾や谷部にも少量であるが土器が散布している。本地区では縄文人が好んで選地した段丘地形が発達していないため，海岸部に比べると縄文時代の営みは小規模であった可能性が高いであろう。しかし基本的に海辺と山における活動があいまって生活の基礎をなしていたであろう。

弥生時代，特に前期には資料が少ないが，この時期においては海辺砂丘付近が主な生活の場であり，丘陵・谷部には遺物がほとんど散布しない。この在り方が大きく変わるのは，弥生時代後期末頃であり，海辺だけではなく，丘陵裾・谷口を中心として広く土器が散布し，中には遺物を集中的に採集できる地点も生じてくる。

このような現象が耕地開発の進捗が平野奥部に及んだ結果であるのか，当地域が富山平野の西からの入口の水運を扼し，また加越能（加賀・越中・能登）の陸路の接点となることに由来する政治・軍事的理由によるものかは，即座には判断できない。

しかし古墳時代には，再び丘陵・谷部での遺物散布量が減少し，またこれらの動向は広く北陸において見ることができるため，その動向に政治的な背景が関係していたことは間違いない

であろう。ただし古墳時代には，谷口や谷をはさむ丘陵上に多くの古墳が成立し，人々の営みの重要な場となってきている。また園カンデ窯に示されるように，わずかながら手工業関連の資料があり，弥生後期の変化は，たとえ政治的な背景によるものであっても，丘陵・谷部の資源を再開発する端緒になったものと予測しておきたい。

このような在り方を前提として，古墳の築造を停止する古代には，谷口・谷・平野に面した丘陵裾に著しく多量の遺物が散布するようになった。また少量ではあるが平野部や丘陵部においても遺物を採集できる。この時期が，丘陵・谷部における営みの確立期であり，海辺と山，またおそらくは里の一体的な経営のしくみが成立したのであろう。

中世以後，採集資料においては中国製陶磁器・珠洲陶器・伊万里・京焼のように水運によって運んだ様々な流通品が増加し，丘陵には山岳宗教遺跡や城館遺跡が多く分布するようになる。このような営みが古代以後，着実に水準を高めて現代の景観に連なったと考えて良いであろう。

ただし今後の課題として，平野中央部と丘陵高地部の問題をあげておきたい。平野中央部の多くに地区においては，近世以前の資料をほとんど採集できない。しかしこの地区も遅くとも古代以後には，生活の場となりつつあったことを採集資料から推察できる。今後この地区を深く掘削する機会に，潟湖の縮小の過程をより詳細に解明したい。また本調査は平坦地における遺物採集を中心とするものであるが，人々の営みは海際から平地・斜面・山頂に至るまで実に多彩である。今後，これら高地の遺跡についても，より詳細に把握する努力を行っていきたい。

（宇野隆夫・大野 究）

参　考　文　献

大野究 1990「久目村の考古資料」『久目村史』

大野究 1994「奈良時代の十二町潟」『氷見春秋』第30号，氷見春秋会

弘源禅寺総合調査団 1994『越中二上山と国秦寺 ―弘源寺総合調査予備報告書―』桂書房

高岡徹 1990「氷見南部地域における中世山城とその性格」『富山市日本海文化研究所紀要』第４号

富山県教育委員会 1979『昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧』

富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1961『故郷の城址』

富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1964『富山県氷見地方 考古学遺跡と遺物』氷見高歴史クラブ報告書 No.11

富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会 1993『珠洲大畠窯』

氷見市教育委員会 1980『富山県氷見市堀田大久前遺跡発掘調査概報』

氷見市教育委員会・氷見市立博物館 1983『氷見市遺跡地図』氷見市文化財所在地図 No.1

氷見市教育委員会 1988『富山県氷見市 堀田西谷内遺跡試掘調査報告書』

氷見市教育委員会 1993『氷見市遺跡地図［第２版］』氷見市埋蔵文化財調査報告書第14冊

氷見市教育委員会 1994『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第16冊

氷見市教育委員会 1995『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第17冊

藤田富士夫 1983『富山』日本の古代遺跡13，保育社

堀宗夫 1993「越中の中世城郭の諸問題」『越中の中世城郭』第３号，富山の城を考える会

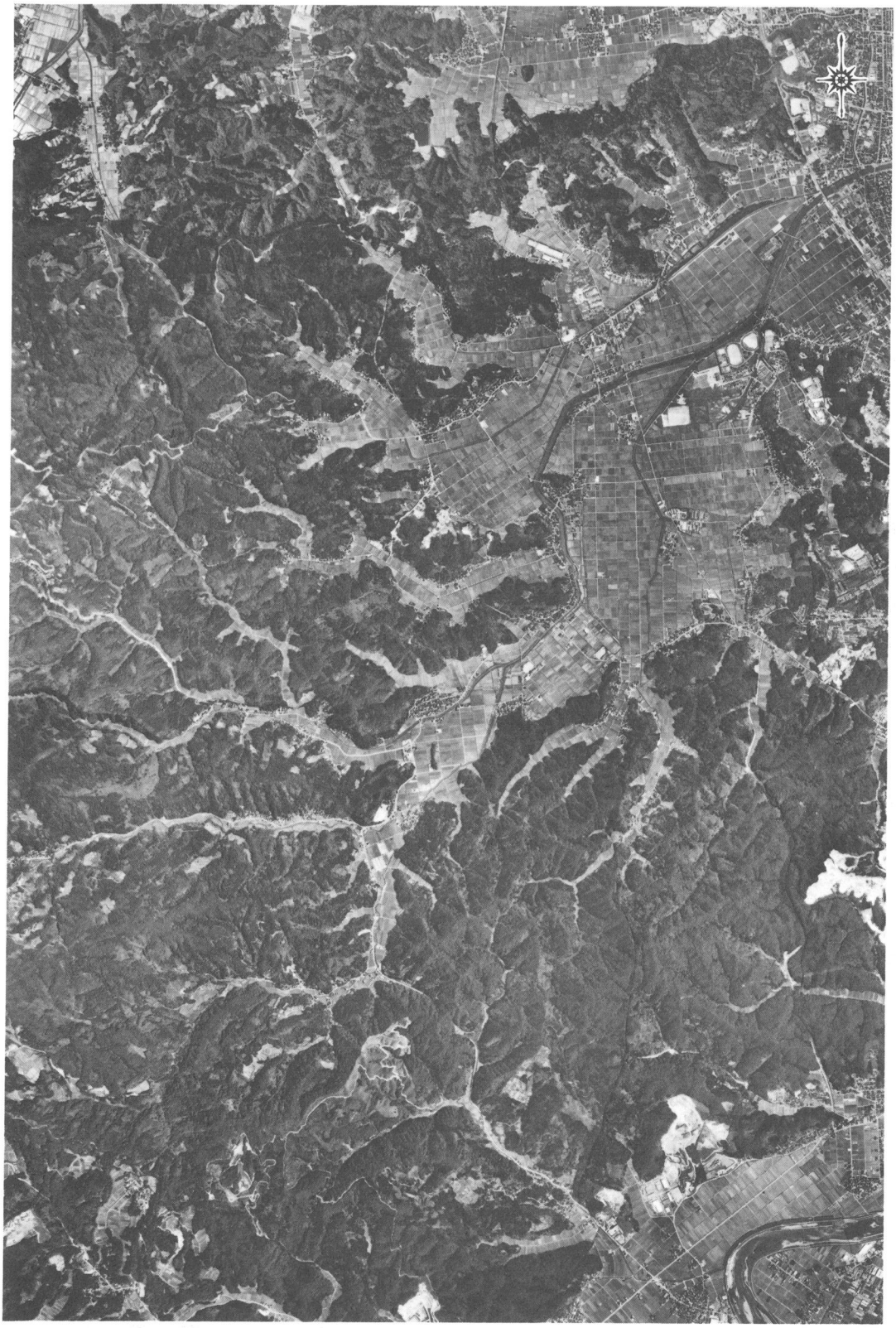
湊晨 1969「氷見市上久津呂遺跡」『富山考古学会連絡紙』33

図　　版

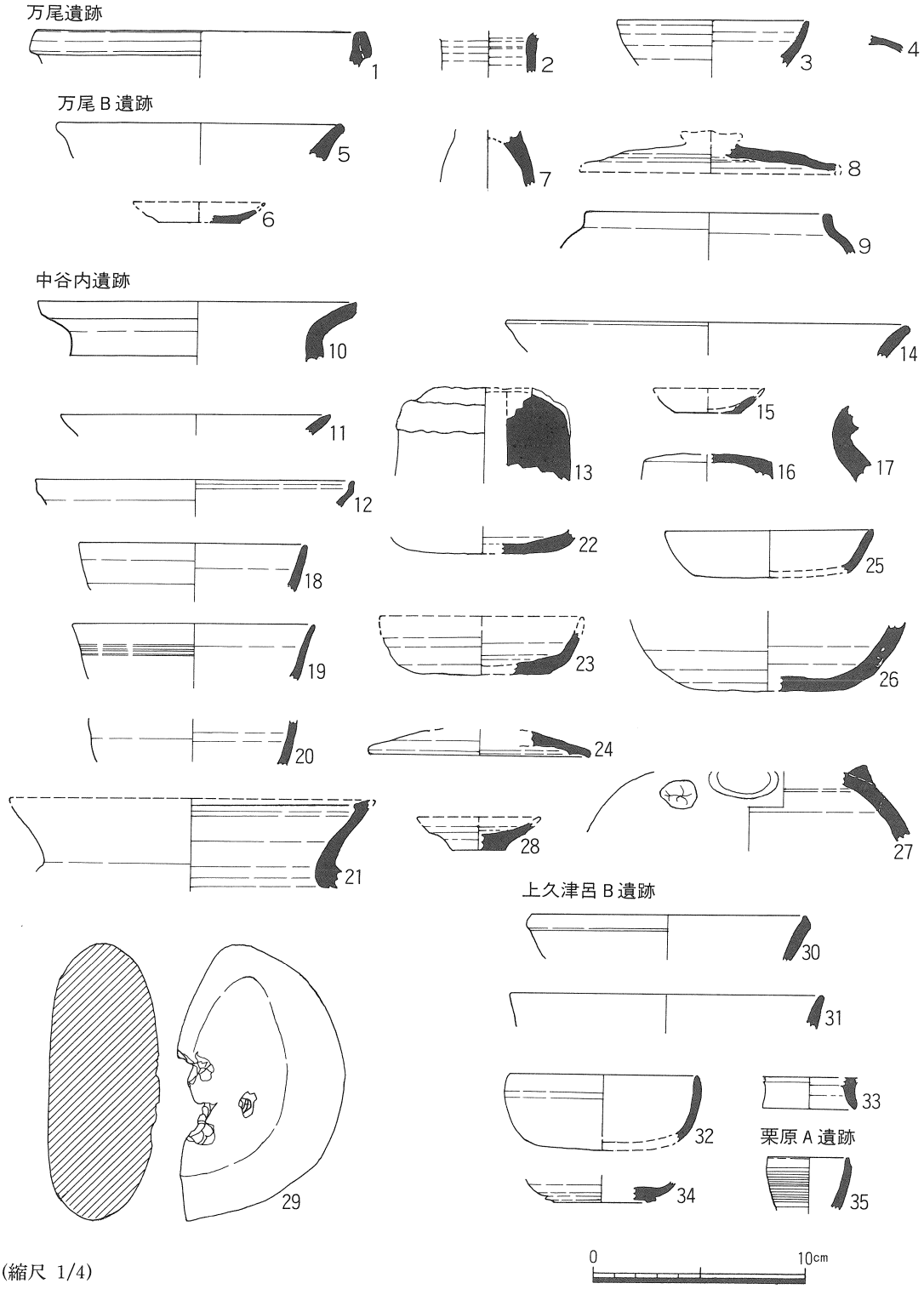
図版一　C地区航空写真（一）

1947年撮影（縮尺 1/43,400）

図版二　C地区航空写真(二)



1992年撮影（縮尺 1/43,400）


万尾遺跡
1
2
3
4
万尾Ｂ遺跡
5
6
7
8
9
中谷内遺跡
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
上久津呂Ｂ遺跡
30
31
32
33
34
栗原Ａ遺跡
35
0
10cm

（縮尺 1/4）

図版四　遺物実測図(二)

深原打越遺跡

36　37　38　39　40

飯久保後山遺跡

41　42　43　44　45　46　47

深原前田遺跡

48　49　50　51　52　53

鞍骨オヤノヤチ遺跡

54　55　56　57　58

飯久保山ノ下遺跡

61　62

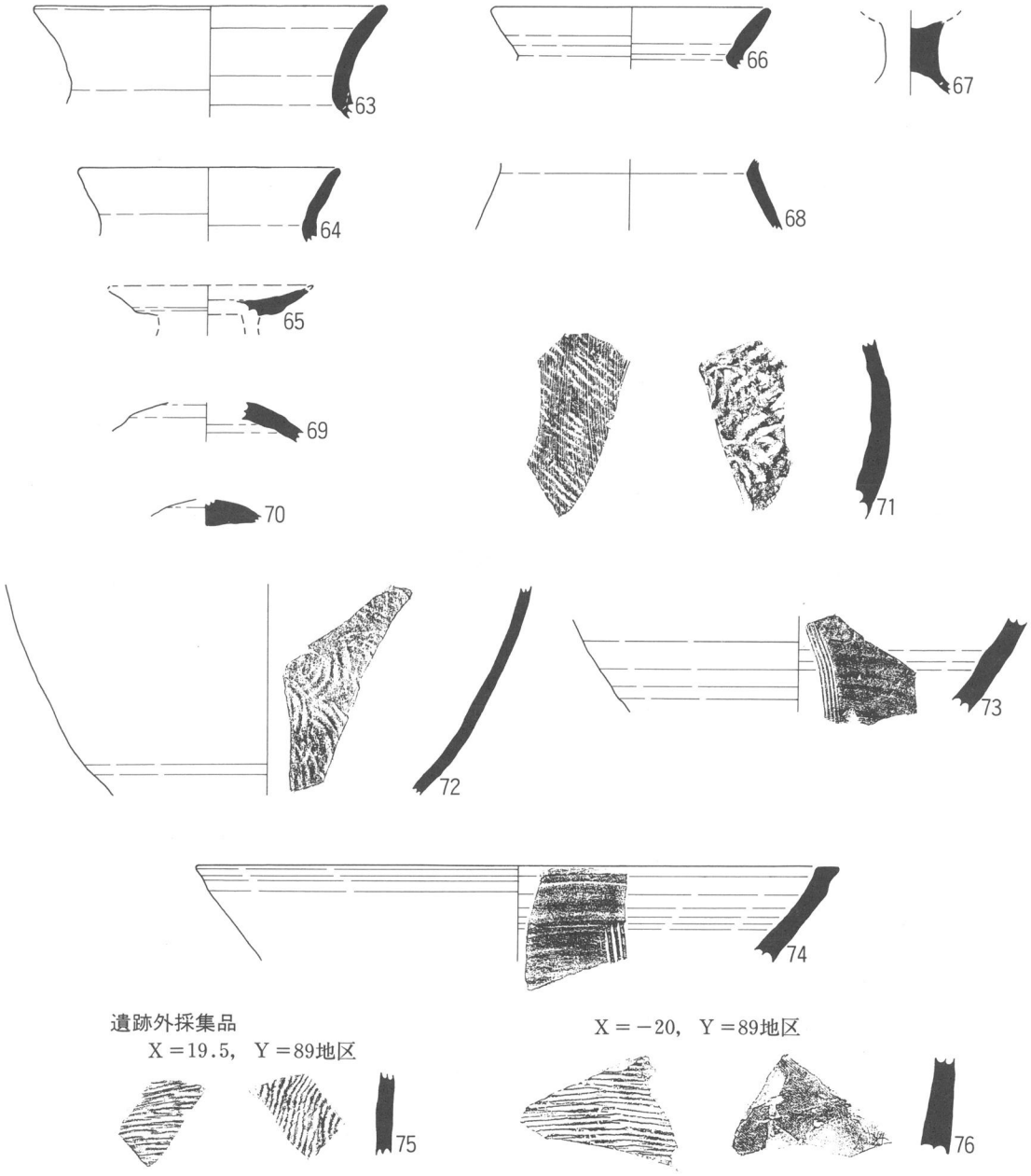
寺中向遺跡

59　60

(縮尺 1/4)

0　10cm

矢方一丁目遺跡



(縮尺 1/4)

X＝－22,
Y＝88地区

77

X＝－22，Y＝88地区

78

X＝－19.5,
Y＝87地区

79

X＝－18.5，Y＝89地区

80

X＝－17.5，Y＝89地区

81

X＝－17.5,
Y＝90地区

83

X＝－17.5，Y＝89地区

82

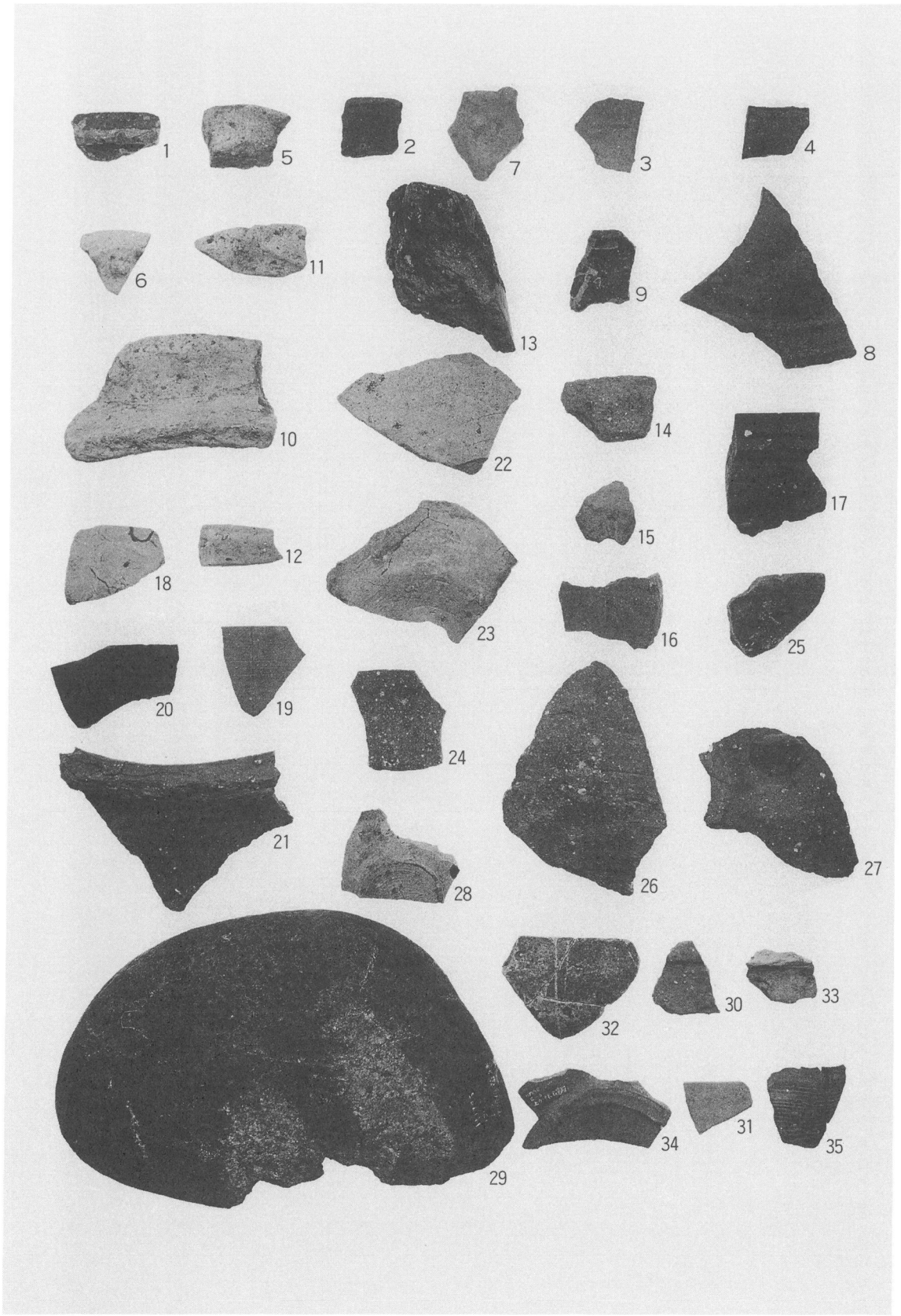
X＝－17.5，Y＝91.5地区

84

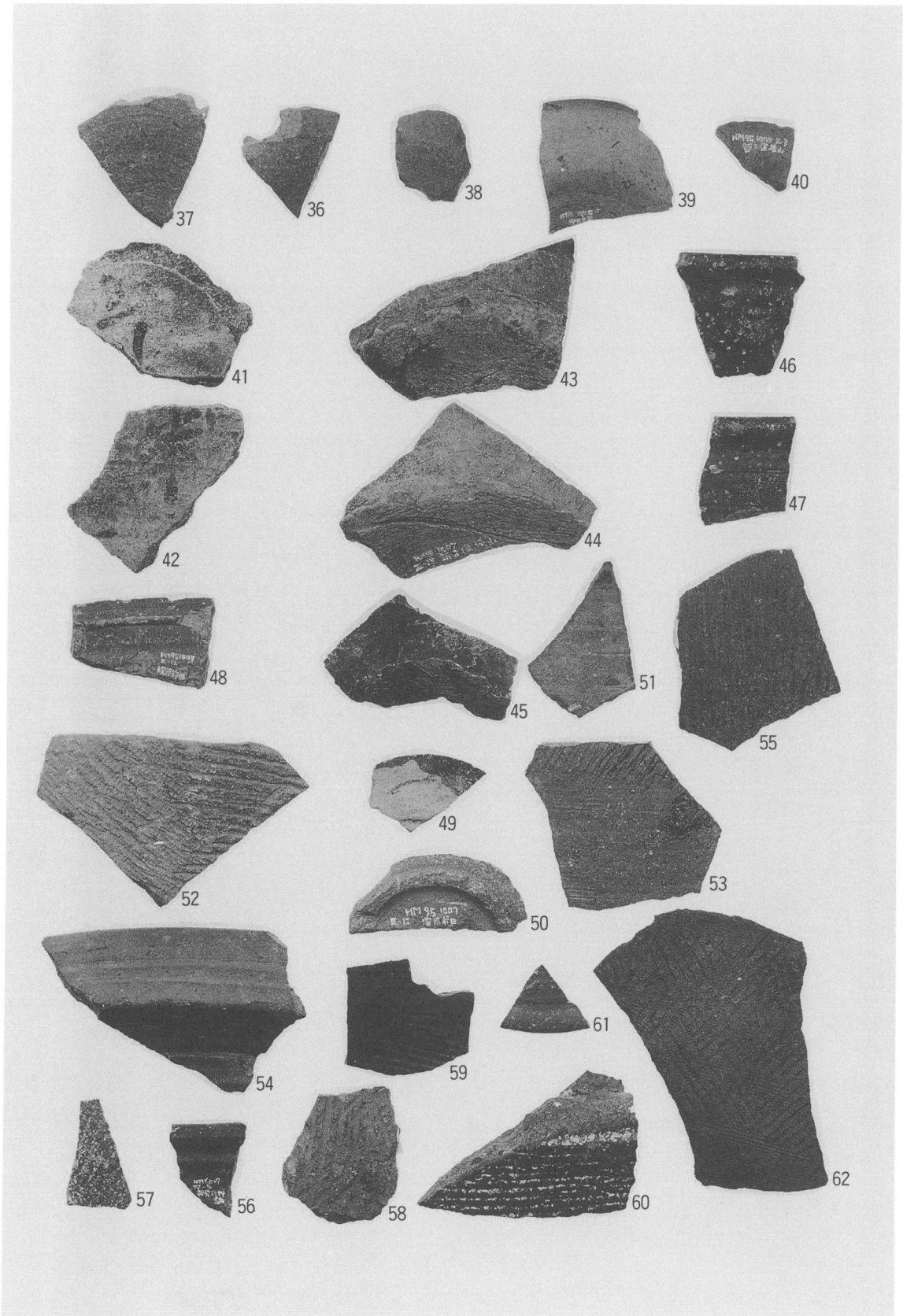
0　10cm

(縮尺 1/4)

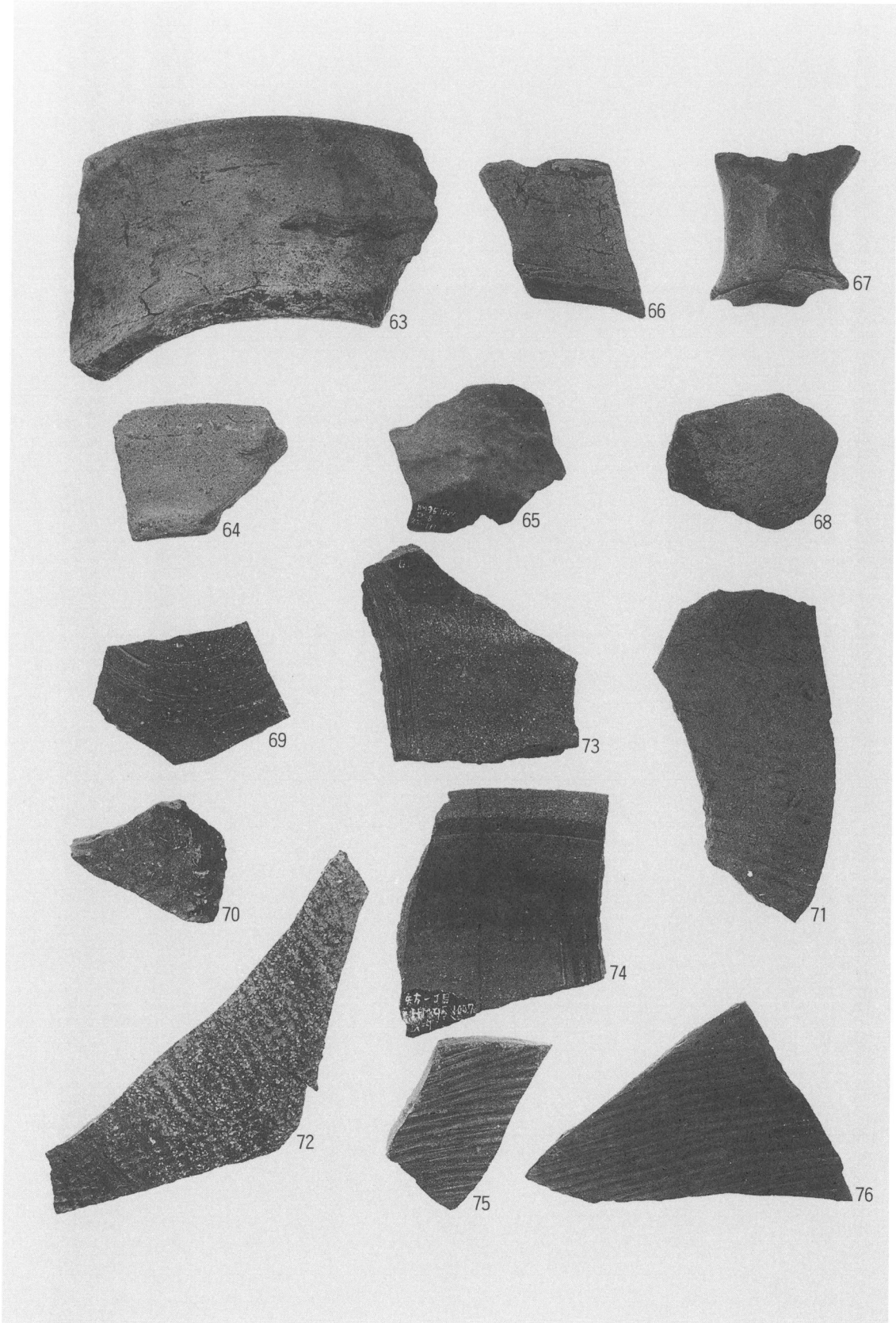
図版七　遺物写真（一）



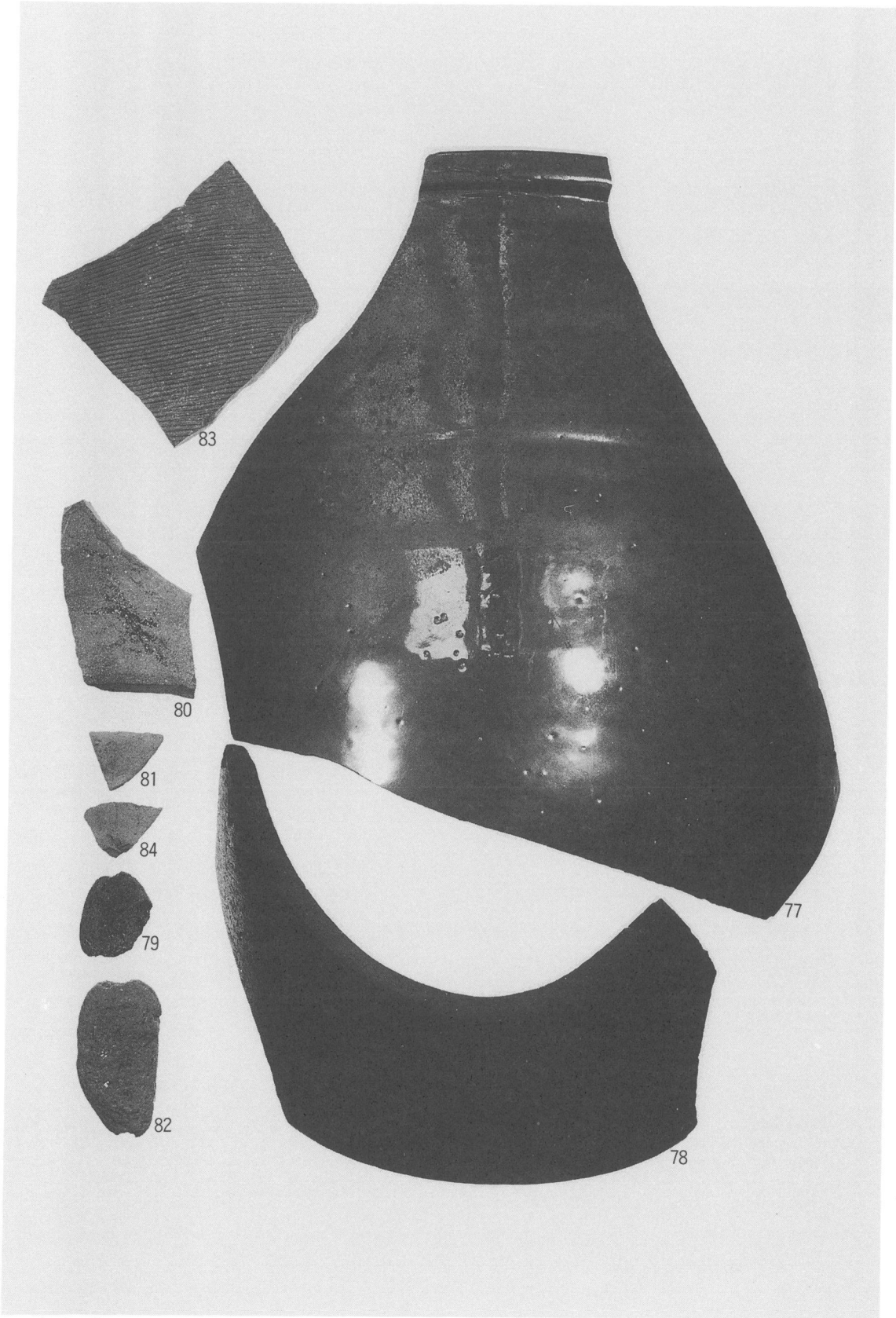
（図版3 参照）


37
36
38
39
40
41
43
46
42
44
47
48
45
51
55
49
52
53
50
54
59
61
62
57
56
58
60

（図版4 参照）

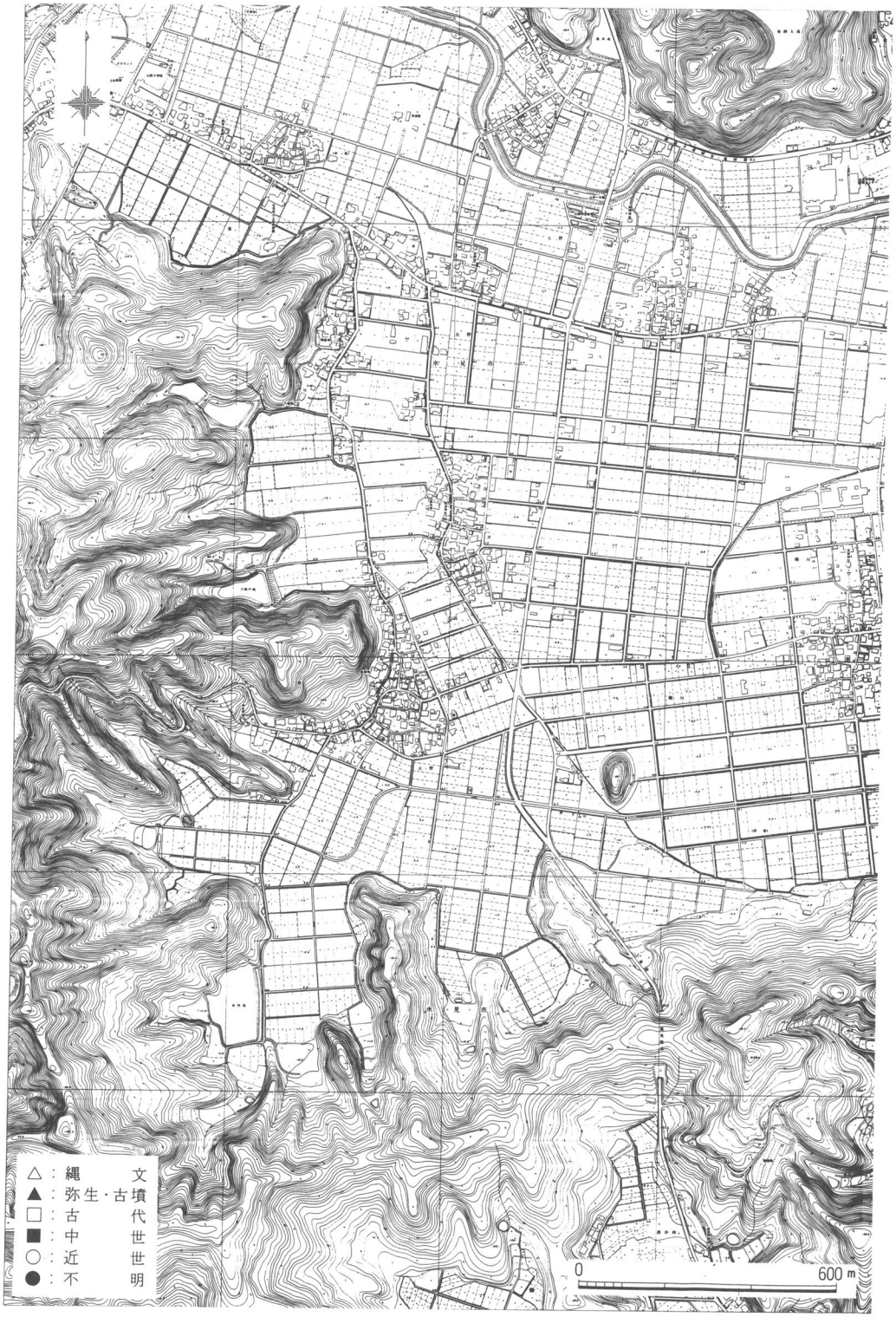


（図版5 参照）



(図版6 参照)

図版一一　C地区の遺跡と遺物採集地点（一）



（縮尺 1/15,000）

図版一二　C地区の遺跡と遺物採集地点(二)

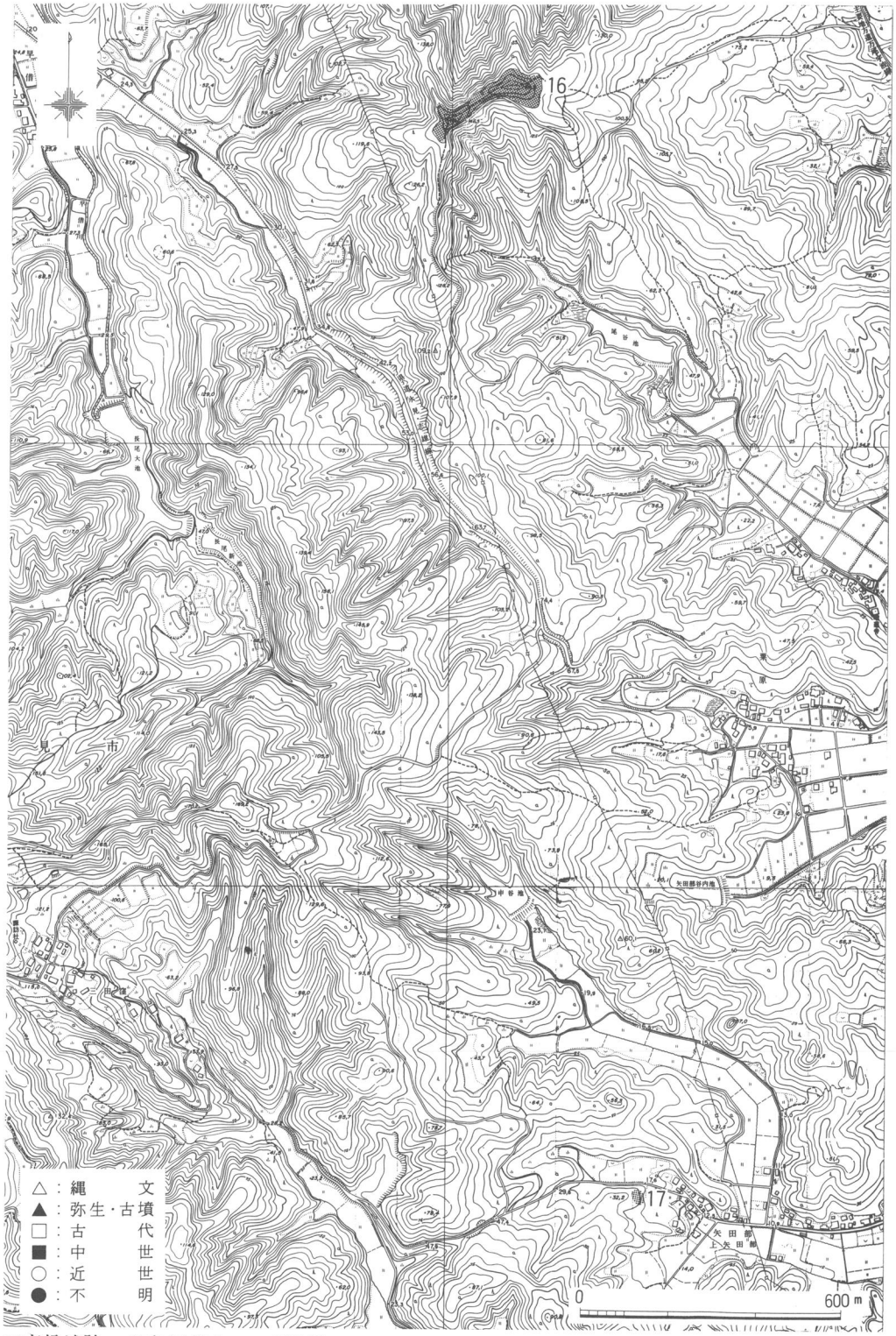
(縮尺 1/15,000)

図版一三　C地区の遺跡と遺物採集地点(三)

△：縄文時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
□：古代遺物採集地点
■：中世遺物採集地点
○：近世遺物採集地点
●：不　明

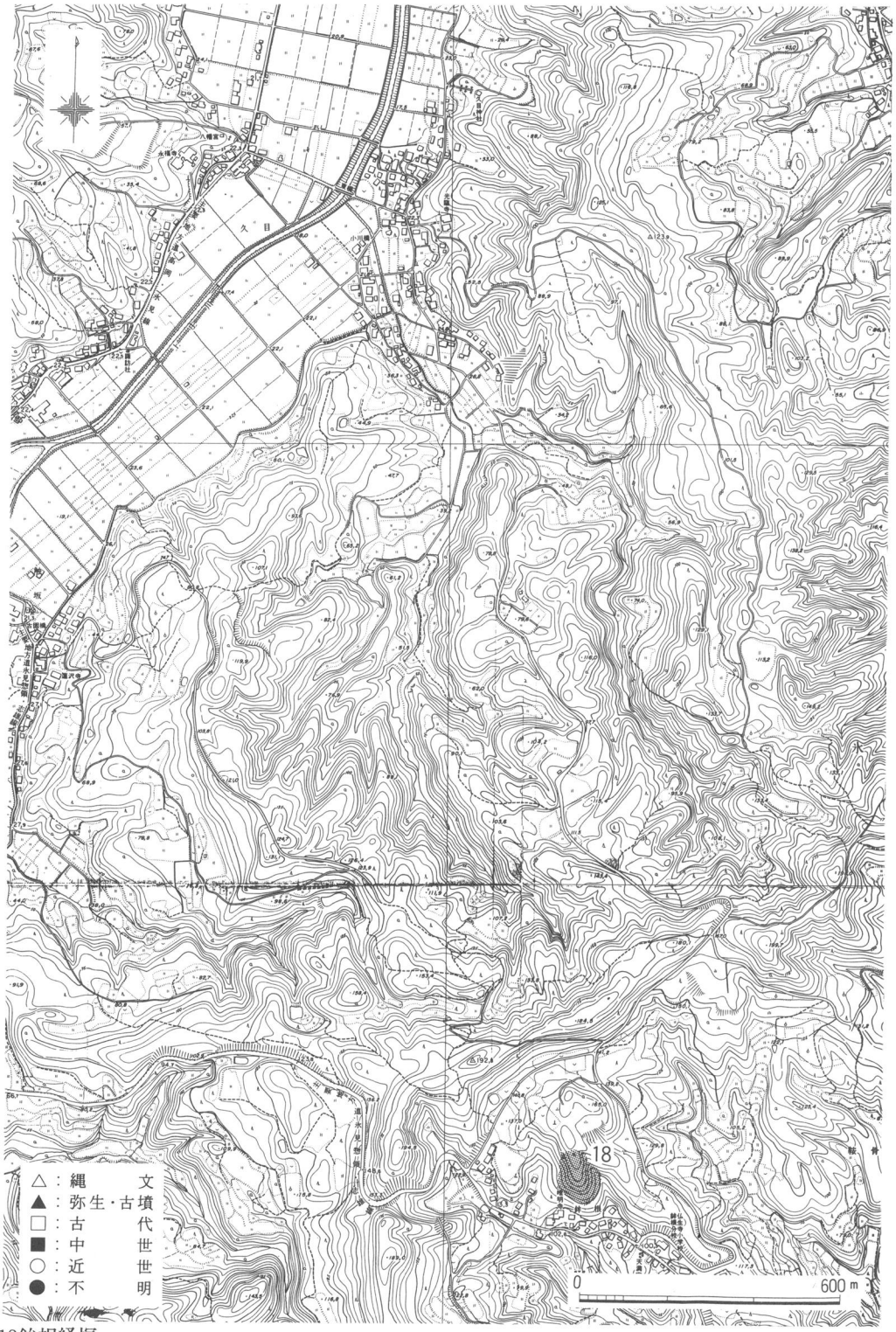
1 万尾遺跡
2 万尾B遺跡
3 中谷内遺跡
4 久津呂城跡
5 下久津呂遺跡
6 上久津呂C遺跡
7 粟原A遺跡
8 粟原B遺跡
9 上久津呂ゴタンダ山遺跡
10上久津呂A遺跡
11上久津呂B遺跡
12布施八ヶ田遺跡
13深原前田遺跡
14深原打越遺跡
15矢田部六反坪遺跡
35飯久保後山古墳群
36飯久保後山遺跡
(縮尺 1/15,000)

図版一四　C地区の遺跡と遺物採集地点(四)



16高松城跡　17矢田部カワベリ遺跡　(縮尺 1/15,000)

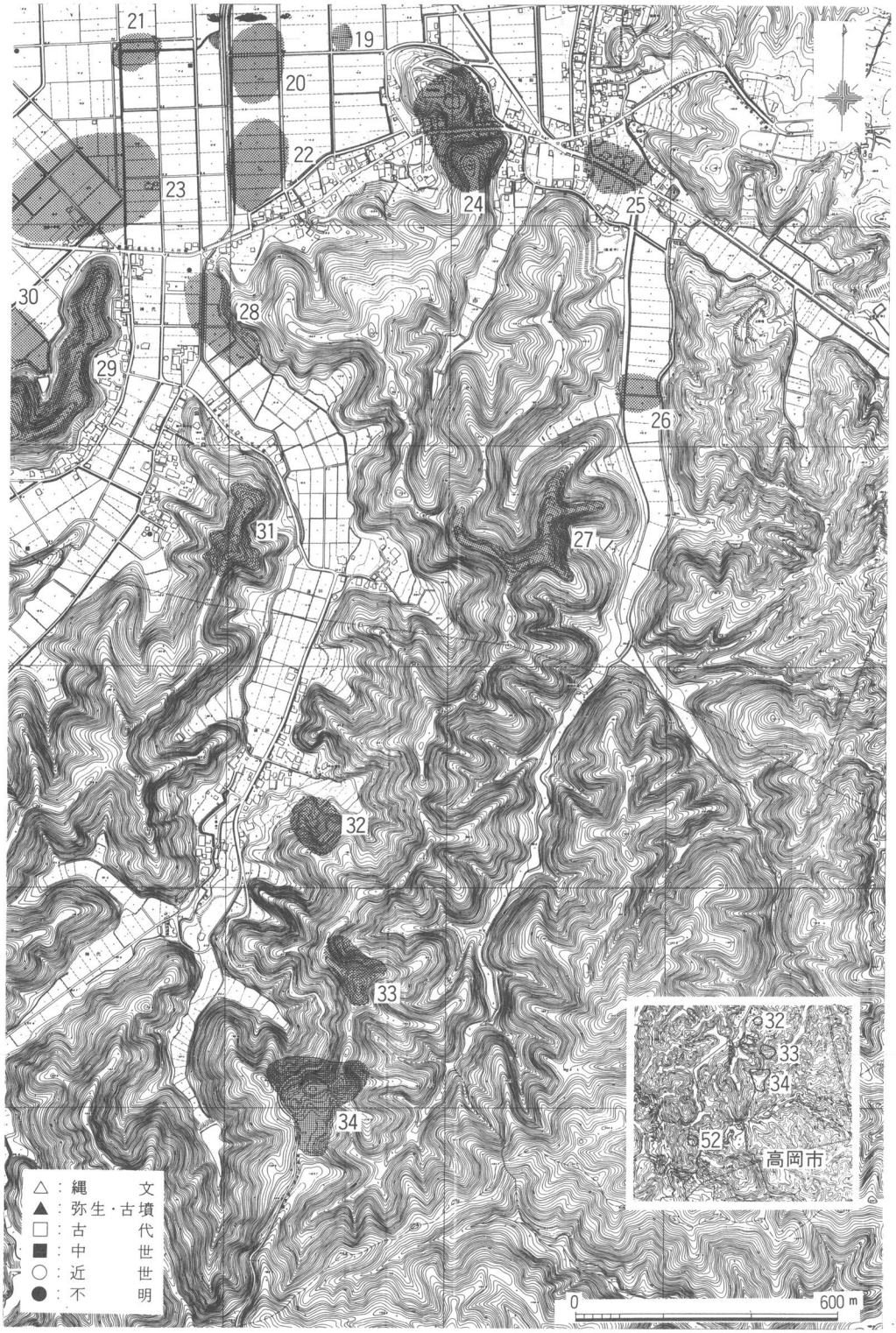
図版一五　C地区の遺跡と遺物採集地点(五)



18鉾根経塚

(縮尺 1/15,000)

図版一六　C地区の遺跡と遺物採集地点（六）



△：縄文時代遺物採集地点
▲：弥生・古墳時代遺物採集地点
□：古代遺物採集地点
■：中世遺物採集地点
○：近世遺物採集地点
●：不　明

19堀田モリノ田塚遺跡
20神代羽連遺跡
21神代ハタケダ遺跡
22石崎遺跡
23飯久保ナガモン遺跡
24堀田ニキ塚山古墳群
25堀田大久前遺跡
26堀田ワタリウエ遺跡
27堀田城跡
28矢方一丁目遺跡
29光西寺山古墳群
30飯久保山ノ下遺跡
31神代城跡
32蒲田B遺跡
33堀田長尾遺跡
34蒲田A遺跡
52神代テラヤシキ遺跡

（縮尺 1/15,000）

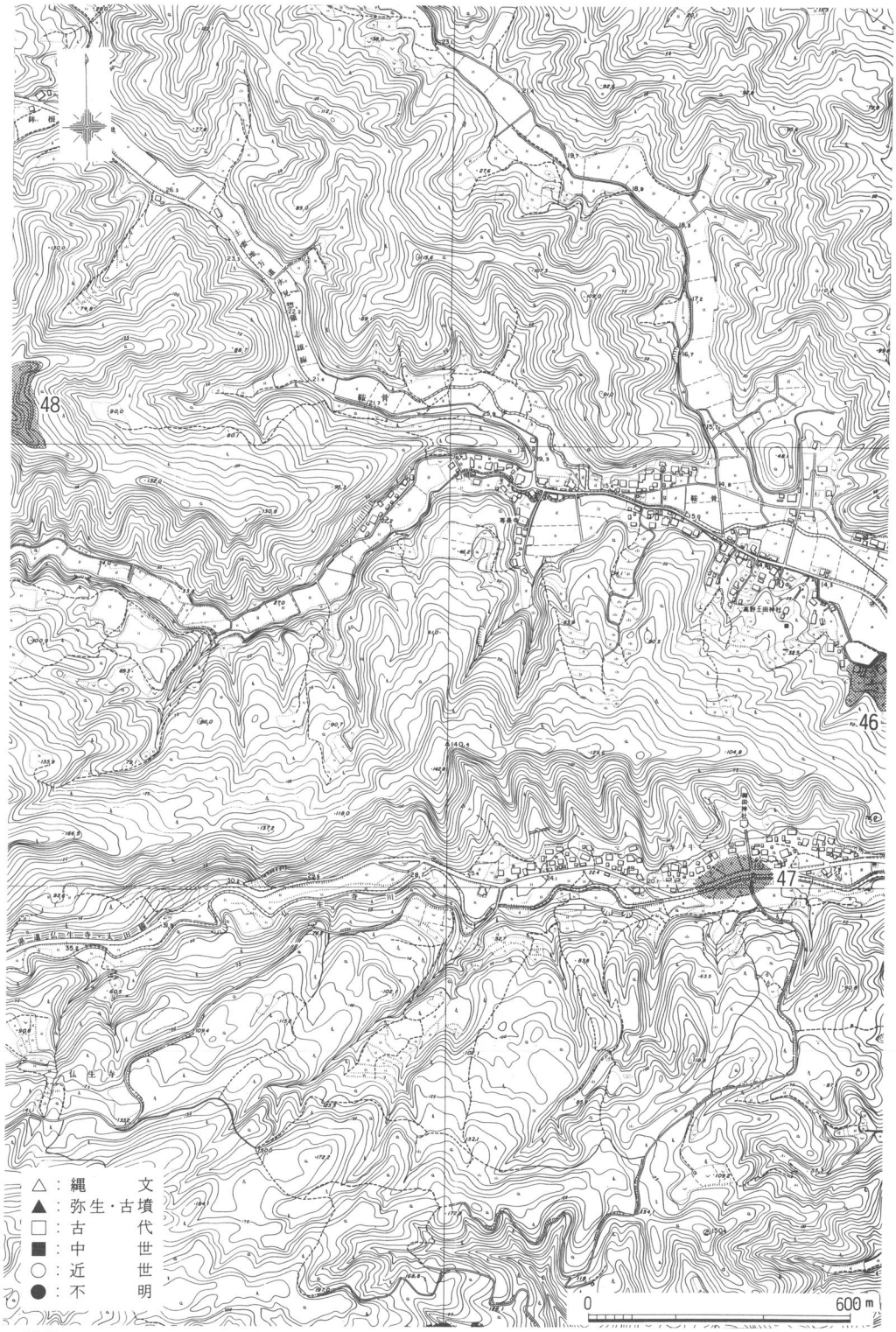
図版一七　C地区の遺跡と遺物採集地点（七）

縄文時代遺物採集地点
弥生・古墳時代遺物採集地点
□：古代遺物採集地点
■：中世遺物採集地点
○：近世遺物採集地点
●：不　明

29光西寺山古墳群
30飯久保山ノ下遺跡
35飯久保後山古墳群
36飯久保後山遺跡
37矢田部ナカタ遺跡
38飯久保城跡
39正保寺遺跡
40惣領遺跡
41惣領砦跡
42惣領古墳
43惣領B遺跡
44惣領コツテラ城跡
45寺中竹端城跡

（縮尺 1/15,000）

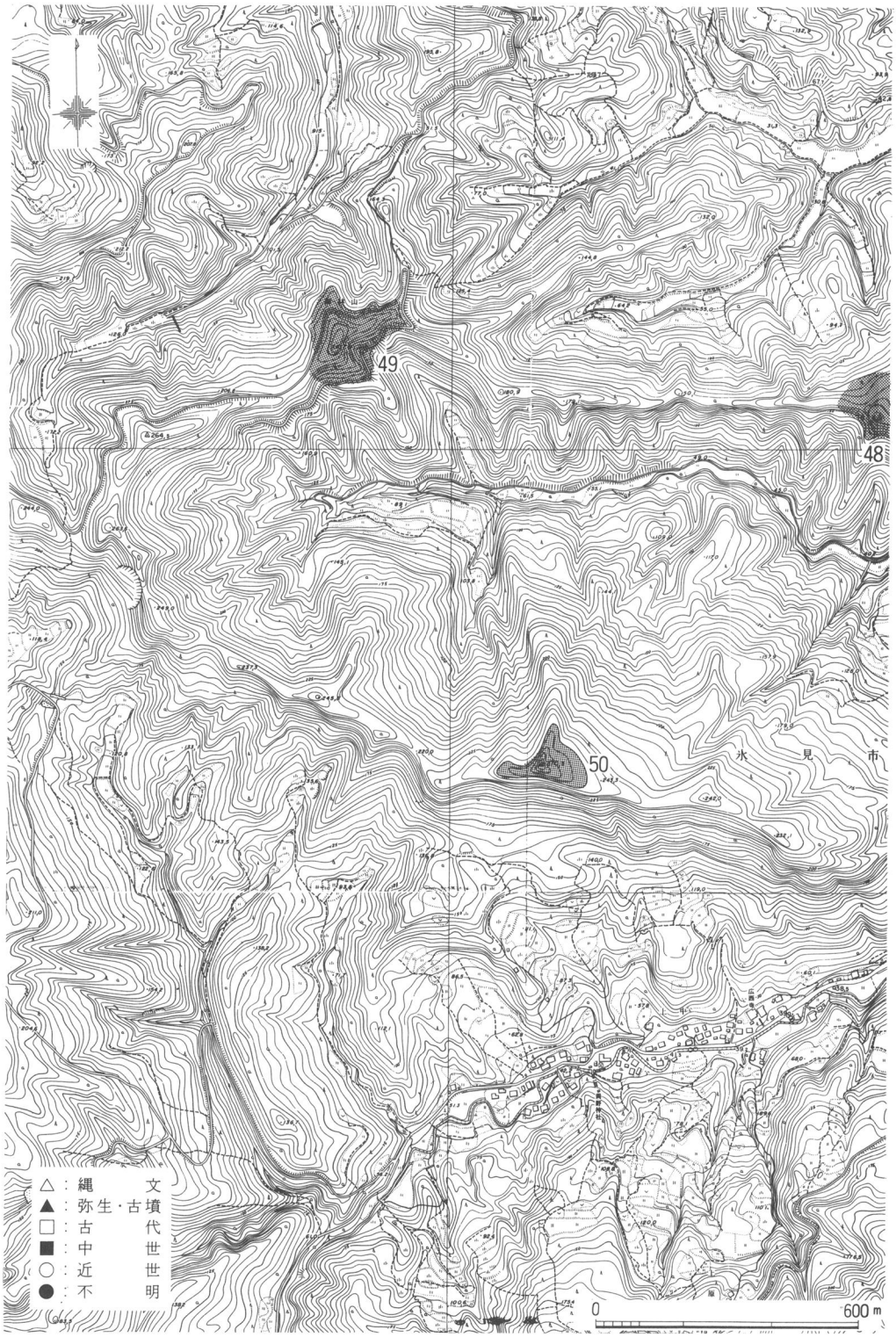
図版一八　C地区の遺跡と遺物採集地点(八)



46鞍骨オヤノヤチ遺跡
47寺中向遺跡
48鞍骨城ヶ峰城跡

(縮尺 1/15,000)

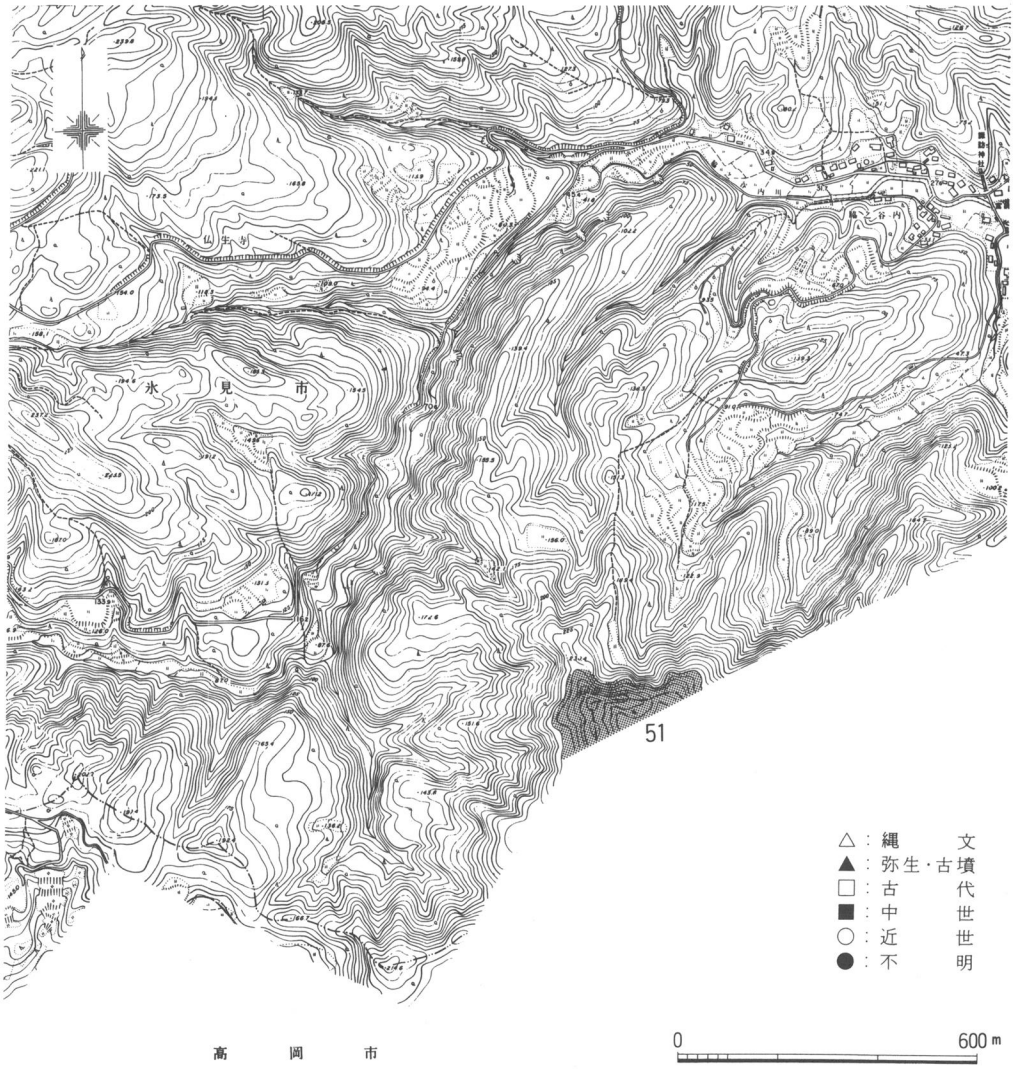
図版一九　C地区の遺跡と遺物採集地点(九)



48鞍骨城ヶ峰城跡
49御林山(鞍骨山)城跡
50仏生寺城跡

(縮尺 1/15,000)

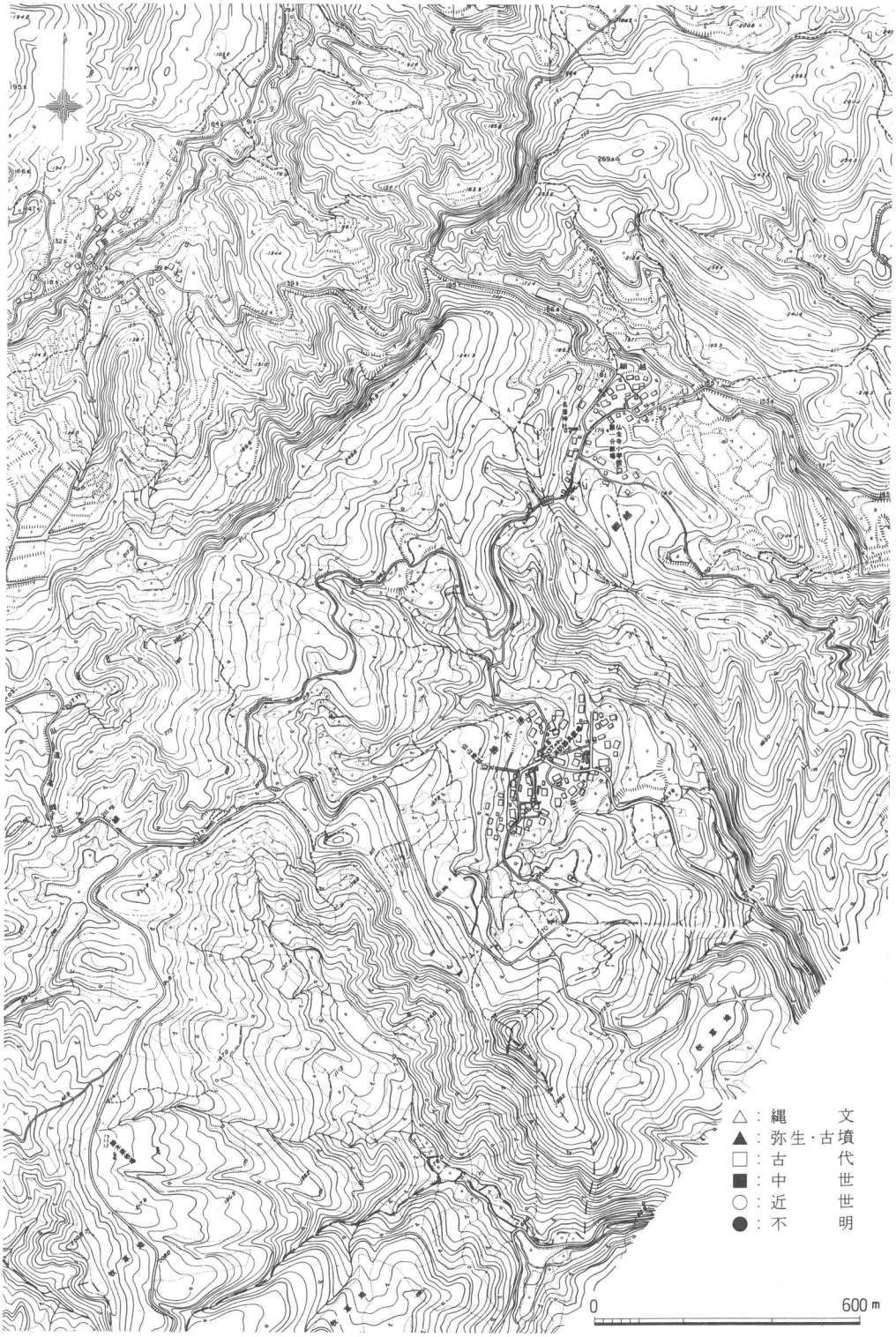
図版二〇　C地区の遺跡と遺物採集地点（一〇）



51二ツ城跡

（縮尺 1/15,000）

図版二一　C地区の遺跡と遺物採集地点（一一）



（縮尺 1/15,000）

1996年３月25日　印刷
1996年３月31日　発行

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ
氷見市埋蔵文化財調査報告第20冊

編集･発行　氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

印　刷　ヨシダ印刷株式会社